

# 山形県内出土の玦状耳飾について

小林圭一

## 1 はじめに

玦状耳飾は中央に円孔を穿ち、外縁から円孔に向かって切目を入れた扁平な石製の装身具である。平面形は環状のC字形を基調とし、古代中国の玉器の「玦」に類似した形状からその名を冠するが、その他に楕円形や方形、三角形等の形状が見られ、材質は少数ながら土製や骨角製も存している。耳朶に穴をあけ、切れ目から挿入して耳に装着したと推定され、縄文時代早期末葉に出現し、前期に量産され、中期前葉まで製作された装身具である<sup>1)</sup>。

大木式土器分布圏である山形県内では、発掘調査された縄文前期の遺跡数の僅少さと相まって、隣県に比して玦状耳飾の出土点数が少ない状況にあり、嘗て筆者は13遺跡31点(土製品10点を含む)を集成した(小林2010)。しかし遺漏したり、その後に報告された資料が存しており、補足することが課題となっていた。そこで本稿では山形県内から出土した資料を再集成し、若干の考察を試みる。近年隣県各地で玦状耳飾の集成が進められており、当該品の様相が明らかにされつつある(福田1999、加藤2010、相原2010a、大竹2010)。山形県内には研究上の指標となる重要な成果も少なからず存することから、資料集成といった基礎的作業を通して、それ等の資料が持つ意義を確認し、縄文前期の地域的特性に関する理解を深めていきたい。

## 2 玦状耳飾の分類と編年

玦状耳飾の系統・起源を巡っては、大陸起源説と列島自生説が並立するが、近年では前者の見解が優勢のように窺える。縄文文化は概して大陸からの影響が微弱であったと見なされているが、縄文研究の泰斗山内清男氏は文化的交渉を示す数少ない事例として玦状耳飾を取り上げ、中国新石器時代青蓮崗文化の玦との関連から、縄文時代の実年代を推定した(山内1964)。この年代観

に対し放射性炭素年代等から芹沢長介氏(芹沢1965)が反論したが、1970年代に入って玦を伴い同文化に先行する河姆渡文化の存在が明らかとなり、江南起源説が強まると共に、中国東北部やロシア極東地域の資料が知られるようになり、中国東北部を初源とする北方起源説も有力視されてきている(宮本2013)。

本稿の玦状耳飾の分類と編年については、図1に示した川崎保氏の研究(川崎2004)に依拠している。但し同氏の分類は中部・関東地方を主としているため、方形や長方形タイプは含まれておらず、必要に応じてこれ等を補った。川崎氏は玦状耳飾の変遷を4期に大別し、以下のように解説している。

最古の1期は早期末で、「浮輪形」に特徴がある。浮輪形は平面形が円形で、中央孔が孔側(切目方向と直角に結ぶ側辺部)や切れ目の長さの和より大きい。厚さは孔側や切れ目の長さより薄いものが主体となる。但し山形県内に明確な事例は指摘できない。

2期は前期初頭<sup>2)</sup>(前期I)で、「金環形」に特徴がある。平面形は円形で、中央孔は孔側や切れ目の長さの和とほぼ同じくらい。厚さは孔側の幅と同じくらいかやや薄い。その他に平面形が円形で、中央孔が孔側より長

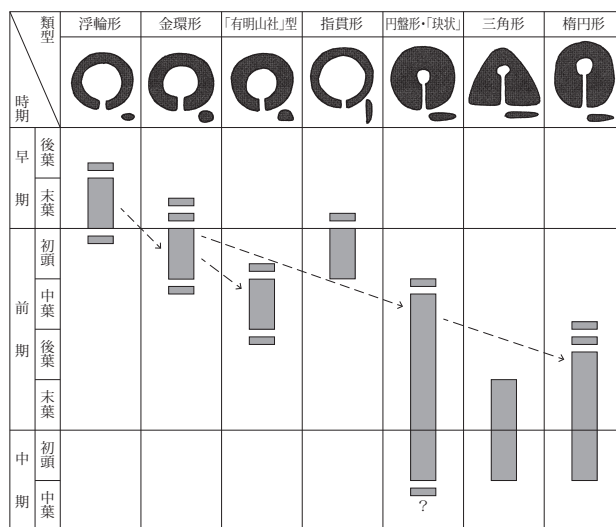


図1 玦状耳飾編年模式図(川崎2004)改変

く、厚さが非常に厚い「指貫形」<sup>ゆびぬき</sup>も存する。

3期は前期中葉～後葉（前期Ⅱa～Ⅲb）で、「円盤形」に特徴がある。平面形は円形で、中央孔は孔側の長さより小さく、厚さは扁平。その他に平面形は円形だが、断面が蒲葺形を呈する所謂「有明山社」<sup>ありあけさんしゃ</sup>型もこの時期と思われる。また地域的な分布を見せるタイプとして東北地方に「楕円形」が出現する。

4期は前期末葉（前期Ⅲc）～中期初頭で、「円盤形」の他に、平面形が「三角形」のものがある。但し「三角形」は山形県内に類例を見出すことができない。

川崎氏は土器の伴出や装身具類のセット関係から浮輪形を最古のタイプと捉え、以降金環形、指貫形、円盤形、楕円形、三角形へと続くとして、全長に対し中央孔が次第に縮小する傾向を指摘した。本稿では上記した編年に従ったが、4期には円盤形と楕円形の他に、方形、長方形のタイプを加えている。

また球状耳飾のサイズについては、加藤学氏の分類を参照した（加藤 2010）。即ち最大径が概ね 35 mm 以下のものを小型、35～55 mm のものを中型、55 mm 以上のものを大型と区分する。石材については報告書の記載に準じたが、筆者が写真で判断した不確かなものや明らかに誤りと思われるものには、表 1 の材質の欄に疑問符を付した。

### 3 山形県内出土の球状耳飾

山形県内はおおよそ分水界をもって、置賜・村山・最上・庄内の四つの地域に区分される。これ等の地域は最上川を基軸に一つの水系で結ばれているが、考古学的事象からは、最上川の狭窄部（五百川峡谷と最上峡）<sup>いもがわ</sup>を境とした地理的单元、即ち最上川上流域（置賜地方）、同中流域（村山・最上地方）、同下流域（庄内地方）に括ることができる。以下では、この地域区分に沿って石製の球状耳飾を概観するが、最上地方の出土例が確認できないため、同地方を除く三つの地域を対象とした。

#### （1）最上川上流域（置賜地方）の様相

最上川上流域の置賜地方は、米沢盆地と長井盆地から構成されるが、前者では 9 遺跡 15 点、後者では 1 遺跡 2 点の球状耳飾（石製）を渉猟した<sup>3)</sup>。

図 2-1～3 は一ノ坂遺跡（米沢市）の大型竪穴住居跡とされた HB 1 内から出土した（手塚ほか 1996）。1・

2 は 1/2 の残存で、平面形は上端が直線気味に作出され、やや横長の小型の円形となる。1 は蒲葺形の断面から「有明山社」型に相当するが、2 は肉厚の円盤形であろうか。3 は 1/4 の残存で、1・2 に比べ扁平で中央孔も小さい。同遺跡の出土土器は前期前葉（桂島式～大木 1 式）にはほぼ限られており、出土した管玉、白玉等の玉類（図 13-10～18）も同期と見ることができよう。

図 2-4・5 は梓山 a 遺跡（米沢市）<sup>ずきやま</sup>から出土した（渋谷ほか 2006）。いずれも滑石製で、4 は 1/4 の残存で、4 区 24-28 グリッド（3 区?）から出土した。外径 42 mm 前後の中型と推定され、断面形態が三角形を呈することから「有明山社」型に近似する。5 は完形品で、4 区東端の浅い落ち込みである SX251 内から出土した。外径は 34 mm、最大厚 6.5 mm を測り、小型の円盤形に相当する。なお 4 区からは前期末葉～前期前葉（大木 1 式）の土器が出土しており、両例ともこの範囲にあるものと思われる。

6 は八幡原 A 遺跡（米沢市）<sup>はちまんぼら</sup>から出土した（加藤編 1975）。1/2 の残存で、1976 年の発掘調査前の採集品である（加藤編 1975）。石材は定かでないが、全長 80 mm の大型の楕円形となる。同遺跡は前期初頭（上川名Ⅱ式）の土器も出土しているが、大木 6 式 2・3 期<sup>4)</sup>が主体となっており（図 6）、同例も後者に位置づけられる。なお同遺跡では土製球状耳飾（図 5-7）も出土している。

7 は八幡原 B 遺跡（米沢市）から出土した（加藤編 1975）。1/2 の残存で、玉質製と報告されているが、出土状況の詳細は不明である。全長 21 mm、推定横幅 24 mm、厚さ 12 mm で、やや横長の小型の指貫形となる。同遺跡では前期初頭上川名Ⅱ式が出土しており、該期に位置すると思われる。

8 は月ノ木 B 遺跡（南陽市）から出土した（黒坂ほか 1989）。1/4 の残存で、斜面下部の 28-29 グリッドの遺物包含層（Ⅱ層）から出土した。推定される外径は 35 mm 前後で、小型と中型の境界にあり、厚さが 9 mm とやや肉厚で、指貫形と思われる。但し実測図の断面では、裏面が剥離している。同遺跡では前期末葉～前期後葉（大木 3 式）までの土器が出土しており、同例もこの範囲にあると思われる。

9 は石ヶ窪遺跡（南陽市）から出土した完形品である

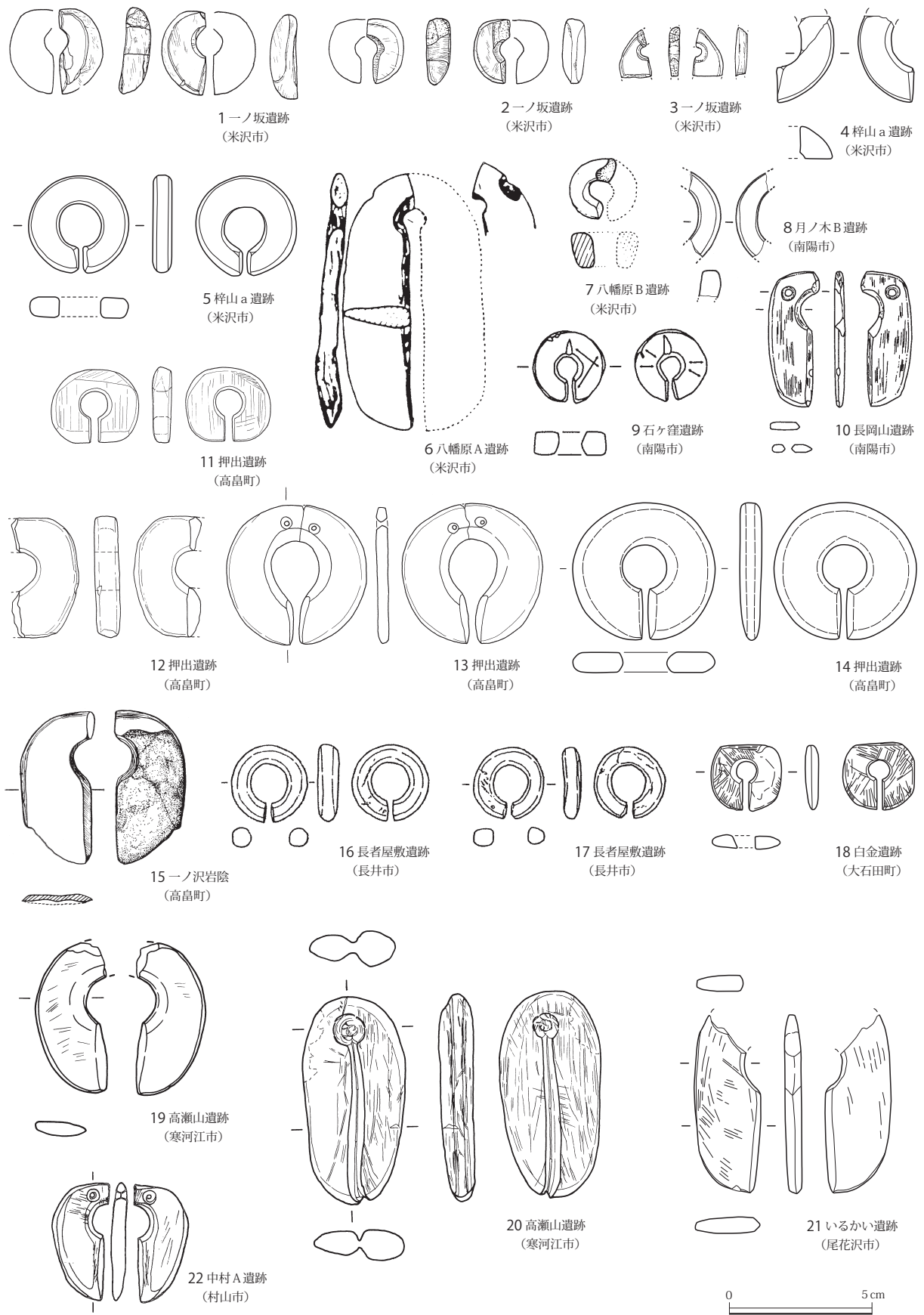


図2 山形県内出土の玦状耳飾 (置賜・村山地方)

(鈴木ほか 2012)。石材は滑石製で、小型の指貫形に相当する。同遺跡では前期初頭上川名Ⅱ式が主体となっており、9も該期に位置づけられる。なお同遺跡では近接して滑石製白玉(図13-2)が出土している。

10は長岡山遺跡(南陽市)から出土した(山田ほか 2013)。1/2残存の緑色凝灰岩製で、二次穿孔を有する。全長47.7mm、推定横幅36mmの中型の長方形に相当する。同遺跡は中期大木7b~8b式が主体であるが、大木5式と同7a式も少量出土しており、同例は前期末葉~中期初頭に相当する。

11~14は低湿地遺跡である押出遺跡(高島町)から出土した。11~13は山形県教育委員会による第1~3次調査(1985~87年実施)、14は山形県埋蔵文化財センターによる第4・5次調査(2011・12年実施)の資料で、半欠品の12以外は完形品である(山口編 1990、水戸部ほか 2014)。11は黒曜石製と報告されているが、黒色の蛇紋岩の誤りであろう。やや横長の小型の円盤形で、集石遺構SM1付近から出土した。器面に研磨痕を残し、稜線がやや角張ることから、完成前の製品の可能性もある。12は1/2の残存で、切目部分も剥離している。調査区南側の盛土遺構ST18付近から出土したが、凝灰岩製と報告されており、器面はややざらついている。中央孔はやや上寄りに位置し、上・下端が直線的に作出されており、中型の方形に相当する。13はやや横長の中型の円盤形で、石材は流紋岩製であり、中央孔はやや上寄りに位置し、切目長が若干長い。器面は丁寧に研磨されており、光沢を有する。中央孔の上部から剥離しており、結束孔を穿って再利用したと推定され、それぞれ近接して出土した。14は自然流路である

SG105(512-138G)のF2層から出土した。やや横長の中型の円盤形で、石材は緑色のネフライト製である。器面は丁寧な仕上がりとなっており、肉眼では研磨痕が観察できない。同遺跡は前期後葉大木4式の単純遺跡であるが、出土した完形品はやや横長で扁平な円盤形が特徴的で、また玉類や玉斧も出土し、11・13を含む石製装身具9点(写真1)は、1996年6月に国の重要文化財に一括指定されている。

15は一ノ沢岩陰(高島町)の第1岩陰から出土した(佐々木 1971)。1/2弱の残存で、下端と裏面を破損しており、全長は判然としないが、横幅が推定52mmで、中央孔が上寄りに位置し切目長が伸長しており、大型の楕円形に相当する。前期の土器に伴出したとされているが、写真図版では大木4式の土器以外明確でない。

長井盆地では長者屋敷遺跡(長井市)で、2点の完形品が土坑墓から出土している。1979年に長井市教育委員会によって実施された範囲確認調査で、土坑から2点の玦状耳飾(16・17)がセットで出土した。土坑は95cm×75cmの楕円形で、地表下55cmで確認され、検出面から23cm下で玦状耳飾1点が出土し、もう1点は28cm離れて出土した。写真では底面より浮いた状態で、若干の高低差が存しているが、詳細な報告は確認できない。当初石材は蛇紋岩製と報告された(長井市教委 1980)が、2点とも乳白色を呈しており、<sup>めのう</sup>瑪瑙製に改められた(佐藤 1984)。16は外径28.2mm、内径14.1mm、厚さ7.5mm、17は外径25.8mm、内径13.2mm、厚さ6.0mmで、前者が若干大きめであるが、両例とも小型の金環形である。同遺跡は中期後葉(大木9~10式)と晩期後葉(大洞A式)が主体で、前期では羽状縄文施文の土器が出土しており、両例は前期初頭~前葉に位置すると考えられる。土坑墓からセットで出土した事例として、全国的に注目を集める重要資料であるが、未だ引用に耐え得る報告が存しないのは、遺憾と言わざるを得ない。

## (2) 最上川中流域(村山地方)の様相

最上川中流域の村山地方は、上山・山形・尾花沢盆地で構成されるが、上山盆地には出土例が確認できず、山形盆地で2遺跡3点、尾花沢盆地で2遺跡2点を渉猟した。

山形盆地では、高瀬山遺跡(寒河江市)で2点出土している(齊藤ほか 2005)。同遺跡は山形盆地西端の最



写真1 押出遺跡石製装飾品(国指定重要文化財)

上川左岸の河成段丘に立地した、大木 5b～6 式 3 期までの大型竪穴住居跡を主体とした環状集落である。図 2-19 は縄文前期集落である 7 区の南側 (17-87 グリッド) から出土した。1/2 残存の緑色凝灰岩製で、推定径 54 mm の中型の円盤形である。中央孔はやや上寄りに位置し、切目長が若干長い。20 は 7 区東端の SP1898 (約 80 cm×40 cm の楕円形の土坑) から出土した。石材は安山岩製と思われ、全長 73 mm、横幅 36.5 mm、厚さ 12.5 mm の楕円形で、表面に多数の擦痕が観察される。上部の中央孔は両面から穿孔されているが未貫通で、その下に切目となる縦の溝が彫り込まれており、玦状耳飾の未製品の可能性が指摘されている。しかし石材は一般的でなく、周縁の整形も丁寧でないことから、断定はできない。同遺跡は山形盆地の拠点集落で大木 5b～6 式 3 期まで継続しており、両例とも該期に位置すると考えられる。

22 は山形盆地北端に位置する中村 A 遺跡 (村山市) から出土した (名和ほか 1983)。1/2 残存の緑泥片岩製で、上部に二次穿孔を有する。上端が直線気味に作出されるが、中型の円盤形に相当し、中央孔が上寄りに位置し、切目長が長い。同例は中期末葉 (大木 10 式) の住居跡が集中する調査区西側から出土したが、同遺跡からは中期中葉大木 8a 式～後期中葉宝ヶ峯 2 式の土器が出土しており、前期末葉～中期初頭の土器は報告されていない。しかし切目長の特徴から、該期に相当すると思われる。

尾花沢盆地には前期の遺跡が多数存するが、玦状耳飾は僅か 2 例しか確認できない。18 は白金遺跡 (大石田町) から出土した完形品である。1991 年に山形県教育委員会により実施された発掘調査で、墓と見られる長軸 1 m の楕円形の土坑 SK 3 から出土した。土坑は東側半分のみが調査され、西側半分は調査区域外のため未調査で、出土状況の詳細は判然としない (山形県教委 1992)。18 は滑石製で、全長 22.6 mm、横幅 24.8 mm のやや横長で、上端が直線的に作出される。小型の方形であるが、中央孔が上寄りに位置し、切目長が若干長い。同遺跡からは前期初頭～前葉の土器が出土しており、同例も該期に位置すると思われる。

21 はいるかい遺跡 (尾花沢市) から出土した (阿部 1983)。C 地区南側の 44-95 グリッドの II 層 (暗褐色土)

から出土したが、出土地点は前期前葉の住居跡 (ST39) に近接している。1/2 弱の残存で、石材は粘板岩製である。現存全長 62 mm、推定横幅 50 mm で、上端の形状は判然としないが、大型の楕円形と思われる。同遺跡では大木 1～2a 式と大木 5～6 式の土器が出土しており、同例は縦長の形状と切目長の特徴から、後者の時期に該当する。

### (3) 最上川下流域 (庄内地方) の様相

庄内地方では最上川の支流であった赤川流域の野新田遺跡 (旧朝日村) と、最上川水系に属さない小山崎遺跡 (遊佐町)、吹浦遺跡 (遊佐町)、川内袋遺跡 (旧温海町) の 4 遺跡で 20 点の玦状耳飾が出土している。

図 3-23 は野新田遺跡の南側調査区 (A 区) から出土したと推定される (伊藤・黒坂 1996)。1/2 の残存で、石材は定かでないが、光沢のある淡い色調から蛇紋岩製と推定される。外径 29 mm の小型の円盤形で、中央孔がやや上寄りに位置している。同遺跡は中期中葉大木 8b 式を主体とした大規模な集落跡で、同 7a 式が僅かに出土していることから、23 は前期末葉～中期初頭に帰属すると思われる。

24 は低湿地遺跡である小山崎遺跡から出土した資料である (渋谷・竹田 2001)。2000 年の山形県埋蔵文化財センターによる第 4 次調査で、第 1 調査区の VI 層から出土したが、同層準は中期中葉大木 8b 式以前の土器を包含しており、前期の所産と考えられる。同例は 1/2 強の残存で、石材は蛇紋岩製である。中型の円盤形に相当し、上部に二次穿孔を有している。

25～28 は吹浦遺跡から出土した資料であるが、25 は庄内古文化研究会による調査 (1952・53 年実施)、26～28 は山形県教育委員会による調査 (1986 年実施) で出土した。同遺跡は山形県最北端の秋田県境に近い鳥海山南西麓に位置しており、前出の小山崎遺跡は北東方 500 m と至近の距離にある。25 は大木 6 式古段階 (1・2 期) が主体の B 地区から出土したもので、蛇紋岩製の未製品である (柏倉・江坂ほか 1955:75 頁)。全長 41 mm、横幅 25 mm、厚さ 5 mm で、長方形を呈する。整形の後に両面から穿孔され、切目が作出される工程が復元され、27 のような仕上がりを意図していたと推定される。

26 は調査区南端の竪穴住居跡 ST1090 の柱穴 (EP 3)

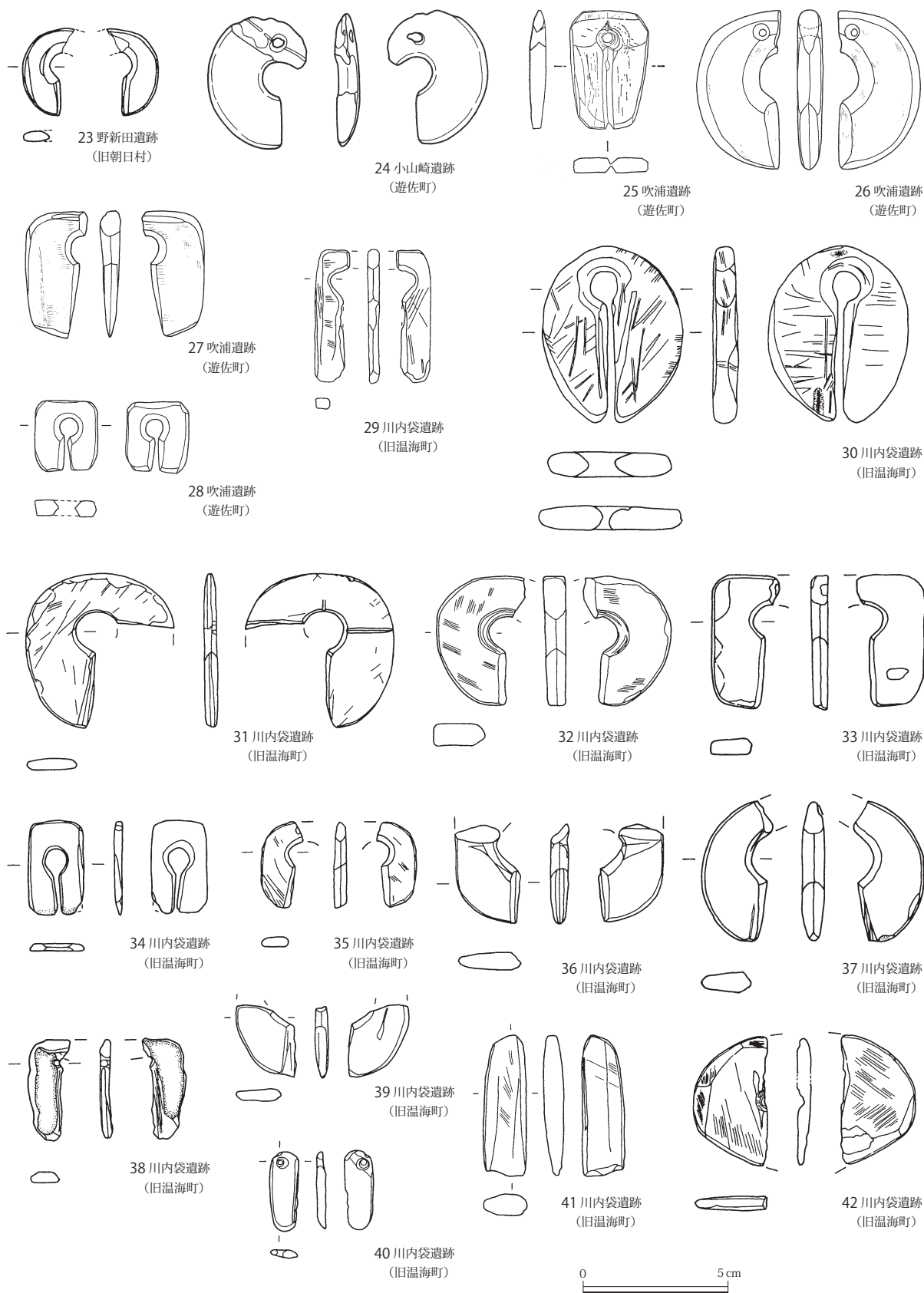


図3 山形県内出土の玦状耳飾（庄内地方）

から出土した(図7)。同住居跡は長軸 6.0 m以上、短軸 5.6 mの長方形の形状で、大木 6 式 1・2 期の土坑(SK1108)や同 3 期の土坑(SK1104)に切られている。しかし北陸系の真脇式や朝日下層式の小片が出土しており、住居の時期を特定するには至っていない。26 は 1/2 残存の緑泥片岩製で、やや横長の大型の円盤形である。中央孔は上寄りに位置し、切目長がやや長くなっており、器面は研磨されているが擦痕が観察され、上部に二次穿孔を有する。27 は調査区南端のフラスコ状土坑(SK1095)の底面から出土した(図7)。同土坑の年代は特定できないが、大木 6 式 3 期以前と思われる。27 は 1/2 の残存で、石材は硬玉製と報告されているが、蛇紋岩製である。中型の方形で、中央孔はかなり上寄りに位置し、切目長が伸長しており、下端は薄く仕上げられる。器面は丁寧に研磨されるが、微かに擦痕が観察される。28 は調査区南側のフラスコ状土坑(SK1087)の覆土中位(F 8)から出土した(図7)。同土坑の年代は特定できないが、大木 6 式 3 期以前と思われる。28 は完形品であるが、中央孔の右側で剥離している。石材は蛇紋岩製で、小型の方形となる。器面は比較的丁寧に研磨されているが、上端には研磨の及ばない箇所が存する。

川内袋遺跡からは 14 点の玦状耳飾(29～41)が出土しており、県内では最大数を誇っている。同遺跡は摩耶山系から直接日本海に注ぐ五十川いらがわを約 800 m 遡った、舌状に張り出した丘陵端部に立地しており、出土土器は大木 2a～6 式まで長期にわたっているが、主体となるのは大木 4～6 式 3 期で、同 6 式前半の大型竪穴住居跡(ST500 住居)も検出されている(齊藤 2012)。丘陵裾部分の A 地区に捨て場が形成されており、29 以外は A 地区から出土した。14 点のうち明確な玦状耳飾は 11 点(29～39)で、残り 3 点(40～42)は製作途中で破損したり、転用された資料と思われる。

29 は丘陵上位の B 地区の SK432 土坑から出土した。同土坑は南北 2.26 m、東西 1.7 m の楕円形で、深さは 24 cm を測る。櫛歯状工具による縦位の波状文を施した深鉢形土器の他、石鏃、石錐、石匙、削器、磨石、滑石製管玉(半欠品)が伴っており、土坑墓の可能性も考えられ、大木 5～6 式に帰属される。29 は 1/2 の残存で、石材は粘板岩製である。全長 45.5 mm の中型の長方形で、

研磨はそれ程丁寧でなく、器面に擦痕が観察される。

30～42 は丘陵裾部の A 地区から出土した玦状耳飾で、30・31・34 が A 地区上段から、その他は A 地区下段から出土した。30 は緑色凝灰岩製の大型楕円形の完形品であるが、中央孔の上部で剥離しており、それぞれ隣接したグリッドで出土した。器面に擦痕や切目作出溝を残し、外周が角張っており、製作途上に破損したと考えられる。

31 は 2/3 の残存で、石材は緑色凝灰岩製である。中型の円盤形で、中央孔はやや上寄りに位置している。裏面には中央孔の中心で切目方向と直交するように横溝が彫り込まれており、右側の切目の一端がその溝に沿って剥離している。中央孔上端と左右の溝は、中央孔の位置を決めるための割付線であろう。研磨はそれ程丁寧ではなく、器面に擦痕や形割り痕跡が観察され、製作途上に破損したと考えられる。32 は 1/2 の残存で、石材は緑泥片岩製と思われる。側面に片理面が観察される。やや横長の中型の円盤形で、上・下端がやや直線的で、外縁が角張っている。研磨はそれ程丁寧でなく、器面には擦痕が観察され、製作途上に破損したと考えられる。33 は 1/2 の残存で、石材は緑色凝灰岩製である。中型の方形で、器面はややざらつき、外縁が角張っており、製作途上に破損したと考えられる。

34 は小型の長方形の完成品で、切目部分の一部を欠損する。石材は均質の緑色系で光沢感に乏しく、緑色凝灰岩製または緑泥片岩製と推測される。右側縁に擦切痕を残すが、丁寧に研磨され、下端は薄く作出される。35 は 1/2 の残存で、石材は緑色凝灰岩製である。小型の方形で、研磨はそれ程丁寧でなく、器面に擦痕が観察され、製作途上に破損したと考えられる。36 は 1/4 の残存で、切目部分の破片である。石材は蛇紋岩製で、側面が直線的になっており、中型の方形に相当する。裏面中央孔の右側に横楔形の溝が見られるが、31 のような分割線であろう。37 は 1/2 弱の残存で、石材は緑色凝灰岩製で、中型の円盤形である。製作途上の破損品で、器面の研磨はそれ程丁寧でなく、切目付近には擦切痕が観察される。

38 は 1/2 弱の残存で、石材は粘板岩製で、表裏面は片理面で剥離し暗褐色を呈し、切断面は灰色を呈する。全長 34 mm、現存横幅 14 mm で、外周は形割りの痕跡を

留め、切目部分に擦切痕を残す。穿孔は2～4mmと小さく、製作途上の破損品で、34のような小型の長方形を意図していたと想定される。39は1/4の残存で、石材は緑色凝灰岩製である。切目部分の破片で、現存全長25mmで、中型の円盤形と思われる。製作途上の破損品で、器面の研磨はそれ程丁寧でなく、切目付近に擦切痕が観察される。

40は切目部分の破片に二次穿孔を加えて、垂飾に転用したと推定される。石材は蛇紋岩製で、現存全長27mm、横幅10mmを測る。中央孔の痕跡は確認できないが、切目に相当する右側面に擦切痕を有しており、小型の長方形の破損品と考えられる。器面は丁寧に研磨され、下端は薄く片刃状に仕上げられる。41は下端を破損した短冊状の石製品で、石材は蛇紋岩製である。現存全長49mm、横幅15mm、厚さ7mmで、下端は薄く仕上げられる。表面右側に擦切痕を有することから、中型または大型の長方形の破損品を転用した可能性が考えられる。器面に擦痕が顕著で、光沢は見られない。42は中型の円環状素材の半欠品で、石材は緑色凝灰岩製である。中央に表面からの穿孔が認められ、穿孔途中で破損したと考えられる。

なお川内袋遺跡では、円盤状石製品が23点報告されている（齊藤2012：第326図）。その多くが粘板岩製とされているが、玦状耳飾を製作するための円盤状素材が含まれている可能性も十分考えられる。

#### (4) 小 結

山形県内から出土した石製の玦状耳飾を概観してきた。18遺跡42点を渉猟したが、旧稿（小林2010）では11遺跡21点の集成でしかなかったため、ほぼ倍増したことになる。増加の理由は庄内地方の川内袋遺跡で14点の資料が報告されたことに拠るが、置賜地方でも新出資料が追加された。なお後述する土製を加えると、玦状耳飾の総数は19遺跡52点を数える（図4）。

出土した数量を隣接県と比較すると、宮城県（相原2010a）では27遺跡52点（土製3点・骨角製4点含む）、福島県（大竹2010）では29遺跡53点（石製のみ）、新潟県（加藤2010）では62遺跡193点（土製13点を含む）となっており、原石の産出地で製作遺跡を有する新潟県を別格に置くと、同じ大木式土器分布圏である宮城県とほぼ近似した数量となる<sup>5)</sup>。但し山形

県では発掘調査された縄文前期の遺跡自体が少ないため、隣県よりも遺跡数は少なくなっている。秋田県と岩手県では、玦状耳飾の出土数は明らかになっていない。しかし両県には1遺跡で50点出土した製作遺跡が存しており、出土点数では山形県を凌駕することは間違いない。

秋田県では大木式土器分布圏に属する大仙市（旧協和町）<sup>うえ やま</sup>上ノ山Ⅱ遺跡が、玦状耳飾の製作遺跡となっている（大野ほか1988）。同遺跡は大木4～5式の大型堅穴住居跡（17棟）を主体とした環状集落であるが、玦状耳飾が50点出土している。その殆どが遺構外から出土したが、製作の工程を示す未製品や欠損品で占められており、全形を留めたものは僅か4点に過ぎない。石材は蛇紋岩、滑石、緑色凝灰岩、軟質の凝灰岩の4種類で構成され、小・中型の円盤形や楕円形、長方形が認められる。

岩手県では同じ大木式土器分布圏に含まれる遠野市<sup>あやおりしんてん</sup>綾織新田遺跡（旧称新田Ⅱ遺跡）が、玦状耳飾の製作遺跡となっている（佐藤・小向2002、佐藤浩彦2004）。同遺跡では大木2a～4式にかけての長方形を基調とした住居17棟と半円形の住居1棟が検出されており、大型堅穴住居主体の環状集落の初現となっている。同遺跡では玦状耳飾が50点出土しているが、その内訳は完形品5点、欠損品44点、未成品1点で、二次穿孔を有する例が10点含まれており、粘板岩製1点を除いて全て滑石製である。遺構内覆土から21点、遺構外から21点が出土しており、形態は小型・中型の円盤形乃至は楕円形で、全長23mm前後、33mm前後、42mm前後の3種に類別され、内径は11mm前後が多いと推計されている。

上記したように新潟県や秋田県、岩手県には、玦状耳飾の製作工程が窺える製作遺跡が調査されており、出土点数を飛躍的に増大させている。山形県内で未製品を出土したのは、高瀬山遺跡、吹浦遺跡、川内袋遺跡の3遺跡で、いずれも前期末葉に帰属される。前二者は未製品1点を含むのみで、自家消費的な様相を示すのに対し、川内袋遺跡では製作途上の破損品が顕著に認められ、他所へ搬出することを前提とした生産遺跡であった可能性も否定できない。新潟県には早期末葉～前期中葉まで、滑石の原産地を控えた大角地遺跡（糸魚川市）で玦状耳飾が集約的に製作されていたが、原産地から離れた海岸部<sup>に</sup>にも生産遺跡が存しており、前期中葉～中葉では二



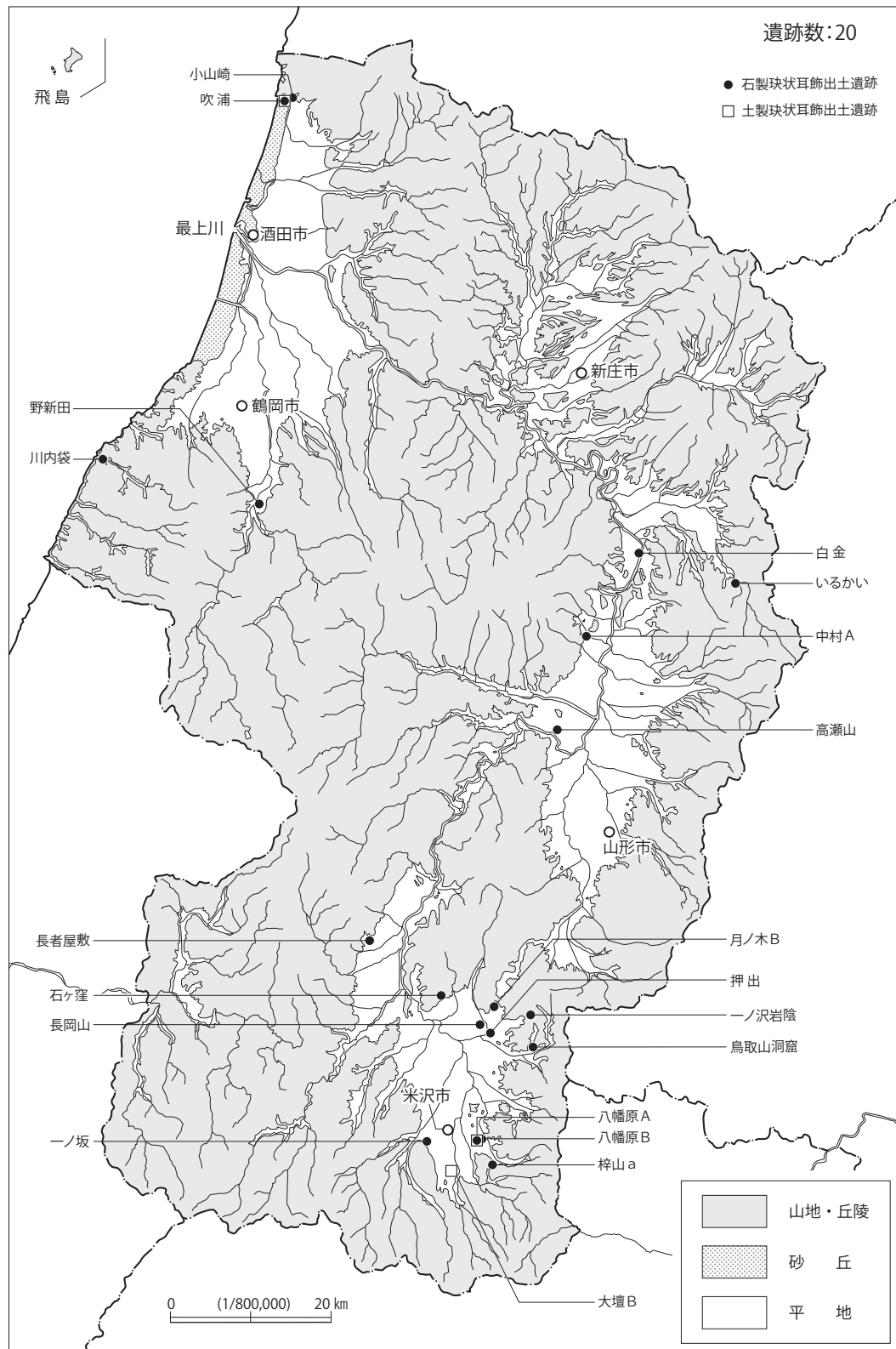


図4 山形県内の珧状耳飾出土遺跡位置図

けんちやや  
軒茶屋遺跡（旧中条町）、前期後葉では大宮遺跡（柏崎市）が該当する（図12）。前期後葉～末葉の川内袋遺跡も、このような遺跡群の延長線上に位置していたのであろうか<sup>6)</sup>。因みに同遺跡は大角地遺跡から直線で約240 km、吹浦遺跡は約290 km離れている。

山形県内で出土した前期初頭～後葉の資料は、完形品乃至は破損品で占められており、明確な未製品は指摘できない。該期には消費地として他所（新潟県方面）から製品として搬入されていたのであろう。一方前期末葉には自家消費的な遺跡を含め製作遺跡が出現している。こ

のことは前期後葉から末葉にかけての時期に、玦状耳飾の流通または人的交流の在り方に変化が生じた可能性が暗示される。

山形県内では完形率（全形を留めたもので、中央孔上部で分離した13・28・30を含む）の高さが注目される。筆者の集成では42点中10点で、約1/4を占めている。新潟県では製品と認定された167点のうち完形品は12点で、比率にして7.2%に過ぎず、石材原産地から距離が離れるに従い、完形率の上昇傾向が指摘されている（加藤2010：15頁）。完形率の高さは、より遠距離に位置する山形県の特性を反映したのであろう。

また残存状況では2/3程度が1点、1/2程度が20点で、半数近くが切目と相対する部分で破損している。中央孔が上寄りに位置し、その上部の側縁幅が狭まったものが多く、構造的にも最も負荷がかかりやすい部位に関連するのであろう。山形県内の出土品で二次穿孔が認められたのは6点で、殆どが中央孔上部に穿たれており、耳飾として再利用するための結束孔であったと思われる。押出遺跡例（図2-13）は対になる部分が揃っており、結束孔の典型をなすものである。一方川内袋遺跡例（図3-40）は、製作途上の破損品を垂飾に転用した可能性が考えられている。新潟県では原石産出地から遠隔になるほど二次穿孔の出現率が高くなると指摘されている（加藤2010：16頁）。しかし山形県では42点中6点（14%）しか認められず、新潟県の事例にそのまま適合させることはできない。

山形県内出土の玦状耳飾についての年代的傾向を、川崎保氏の4期区分で見ると、資料数は前期の遺跡数と相関し、遺跡数の多い2期の前期初頭～前葉（上川名Ⅱ式～大木1式）と4期の前期後葉～末葉（大木5～6式）に多く、遺跡数の少ない3期の前期中葉～後葉（大木2a～4式）には資料数も僅少となる。地域別では2期が置賜地方に偏在するのに対し、4期では庄内地方が中心となる。なお早期末葉の1期の確実な資料は、現時点では確認できない。

石材については統一が図られておらず正確さに欠ける点は否めないが、2期は滑石が主体であったが、3期に蛇紋岩やネフライト、緑色凝灰岩が出現し、更に4期には粘板岩が加わる。またサイズでは、2期は小型と中型が存するが、前者の方が顕著である。3期では中型が主

体になり、4期には大型が加わりサイズの多様化が見られ、特に大型は縦軸が伸長した楕円形や長方形を呈する。

形態の変遷を見ると、2期は円形を基調とし、全長に対し中央孔の占める割合が高い傾向があり、金環形や指貫形、「有明山社」型が存する。サイズが小型の場合には、上端を直線的に作出し、中央孔がやや上寄りに位置した例（図2-1・2・18）が見受けられ、肉厚ながら円盤形（図2-6）も存している。3期は円盤形が主体となるが、方形（図2-12）も出現し、円盤形の場合にはやや横長の傾向が見られる。4期には円盤形の他に、楕円形や方形、長方形と多様な形態が存している。いずれも中央孔が上寄りに位置しており、切目長の伸長化が指摘される。

#### 4 土製玦状耳飾について

山形県内では石製の玦状耳飾の他に、土製の玦状耳飾が3遺跡で10点出土しており、地域的な特徴となっている。その内訳は吹浦遺跡（遊佐町）6点、大壇B遺跡（米沢市）3点、八幡原A遺跡（米沢市）1点で、いずれも大木6式の所産であるが、後二者が大木6式前半に位置づけられるのに対し、吹浦遺跡は大木6式後半の資料となる。

土製玦状耳飾については、1995年に西川博孝氏によって153遺跡818点が集成された（西川1995）。東日本を網羅した体系的な研究で、山形県では吹浦遺跡と大壇B遺跡が取り上げられた。しかし同氏の集成から既に20年が経過しており、当時空白域であった新潟県では6遺跡14点の新出資料が存しており、分布については検討を要する状況にある。土製玦状耳飾は前期後半の関東地方に中心があり、石製と同様に欠損品が多数を占めているが、分布域の北限に位置する吹浦遺跡では、精巧な造作の完形品3点が同一土坑から出土し、異彩を放っている。

以下では、山形県内から出土した土製玦状耳飾と、新潟県と栃木県（一部）を含む東北地方出土の当該品を集成し考察を加えるが、分類については西川氏の研究に準拠した。

##### （1）米沢盆地出土の土製玦状耳飾

最上川上流域の米沢盆地では、盆地南側に位置する大壇B遺跡と八幡原A遺跡で土製玦状耳飾が出土してい

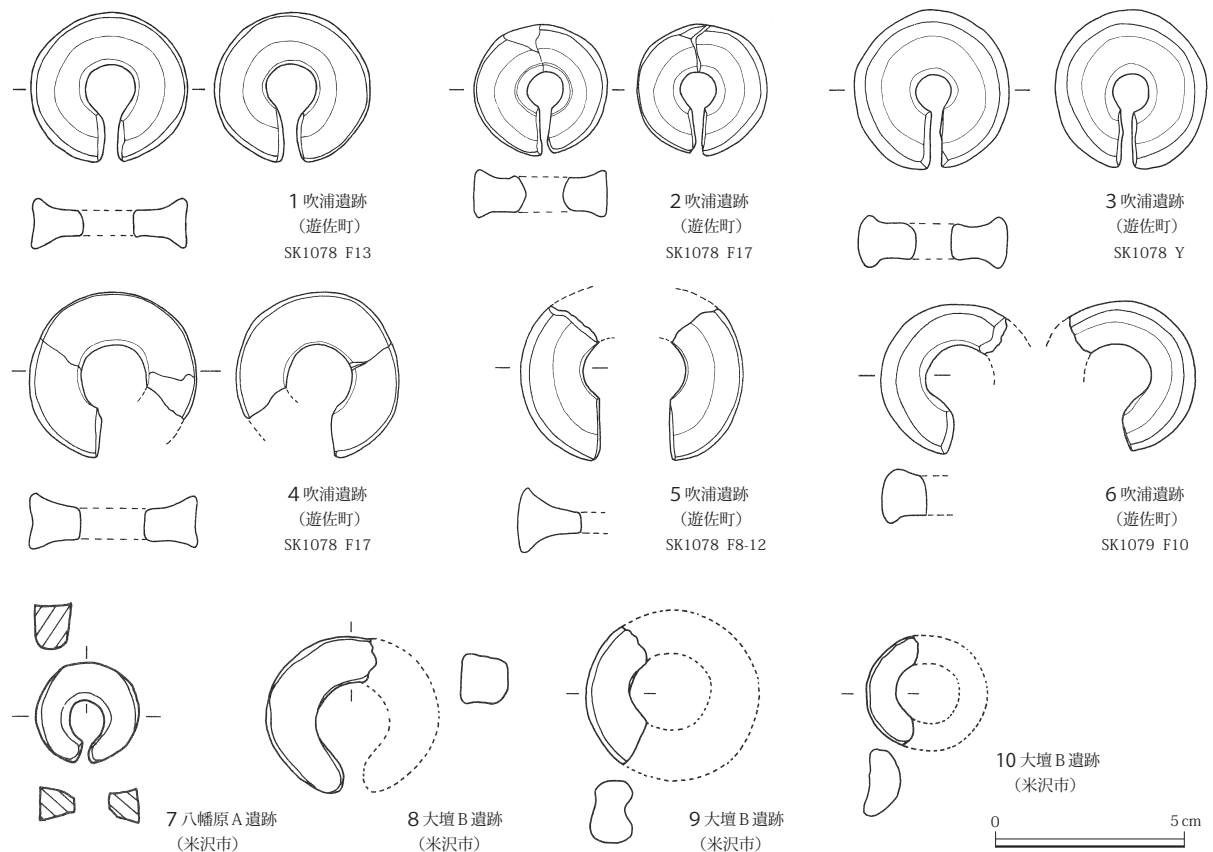


図5 山形県内出土の土製玦状耳飾

る。前者が大木6式1期、後者が大木6式2・3期にほぼ限定され、遺跡単位での変遷を跡付けることができ、両遺跡は約5kmの位置関係にある(図4・6)。

図5-8~10は大壇B遺跡から出土した(山形県教委1986)。いずれも破損品であるが、平面形態は円形で、中央孔が円の中心に穿たれている。切目が確認できたのは8のみで、9・10は環状の耳栓と報告されているが、帰属時期から玦状耳飾の可能性を考慮した。

8はIV区中央の焼土遺構EL1の西側から出土した。1/2の残存で、全長42mm、推定横幅46mm、推定内径20mmのやや横長の円形で、断面は「角型」となり、最大厚は14mmを測る。切目の形状は丸味を持ち、器面は指頭調整で凹凸があり、赤彩が認められる。西川氏は同例の分類を保留したが、「十三菩提タイプ」の変異型と見なしている(西川1995:73頁)。9はIV区中央西側の焼土遺構EL9の南側から出土した。1/4の残存で、現存全長36mm、推定外径46mm、推定内径20mmで、サイズは8に近似する。断面形態は内外の側面を内側に窪ませた鼓形で、最大厚は16mmを測る。10は出土地点が定かでないが、IV区東側の試掘トレンチから出土し

たと推測される。1/3の残存で、現存全長30mm、推定外径32mm、推定内径17mmで、断面形態は三日月形で、最大厚は17mmを測る。

図5-7は八幡原A遺跡のC-5区第4層から出土した完形品である(手塚ほか1977)。外径26mm、内径9mmで、周縁に最大厚があり9mmを測る。中央孔がやや下寄りに位置し、切目長が短く、先端の形状も直線的でない。断面形態から西川氏の「十三菩提タイプ」に相当するが、同氏の集成には含まれていない。

## (2) 吹浦遺跡出土の土製玦状耳飾

吹浦遺跡では6点の土製玦状耳飾が出土している。いずれも平面形が円形で中央孔が円の中心に穿たれ、断面形態は周縁が最も厚く縁取ったように強調されている。橙色を呈し赤彩された精巧な作出で、西川氏の「十三菩提タイプ」の典型となる資料である。このうち3点が完形品で、1~5がフラスコ状土坑SK1078、6が同SK1079から出土した(渋谷・黒坂1988)。両土坑は集落の南側に隣接して構築されており、形状や規模、容量も類似する(図7・10)。また出土土器も接合関係にあり、構築時期が接近していたと判断される(小林

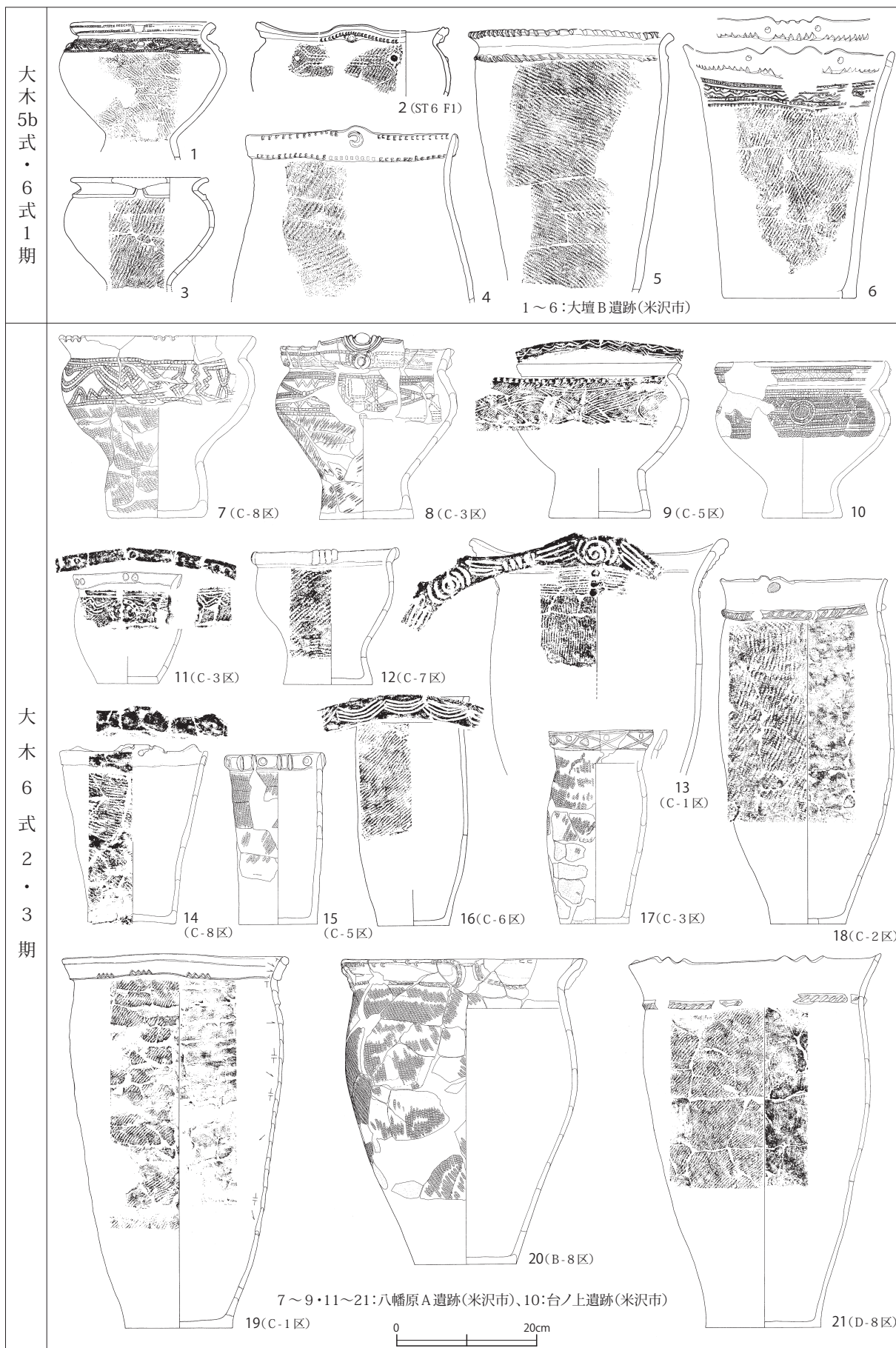


図6 米沢盆地における縄文前期末葉の土器変遷図

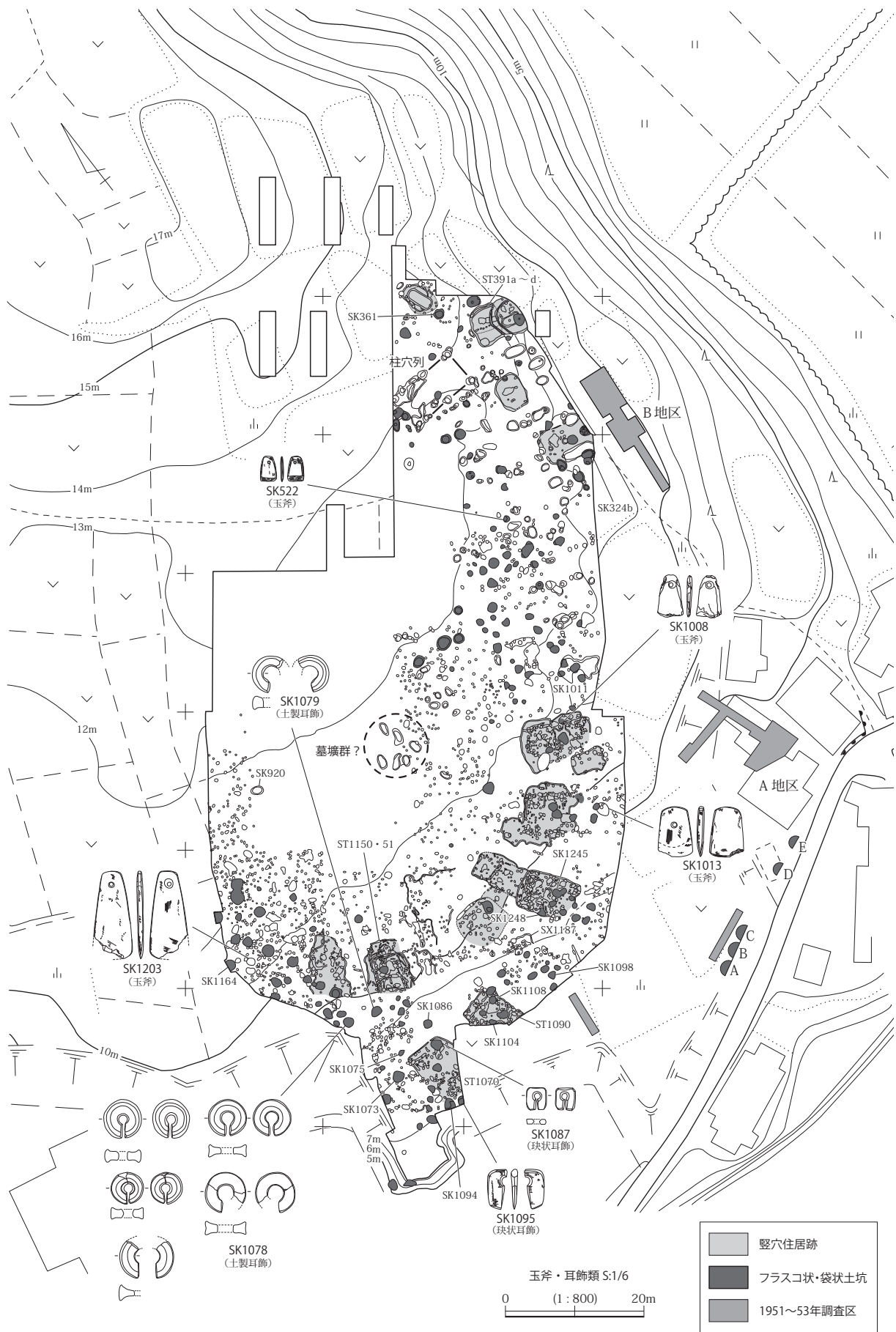
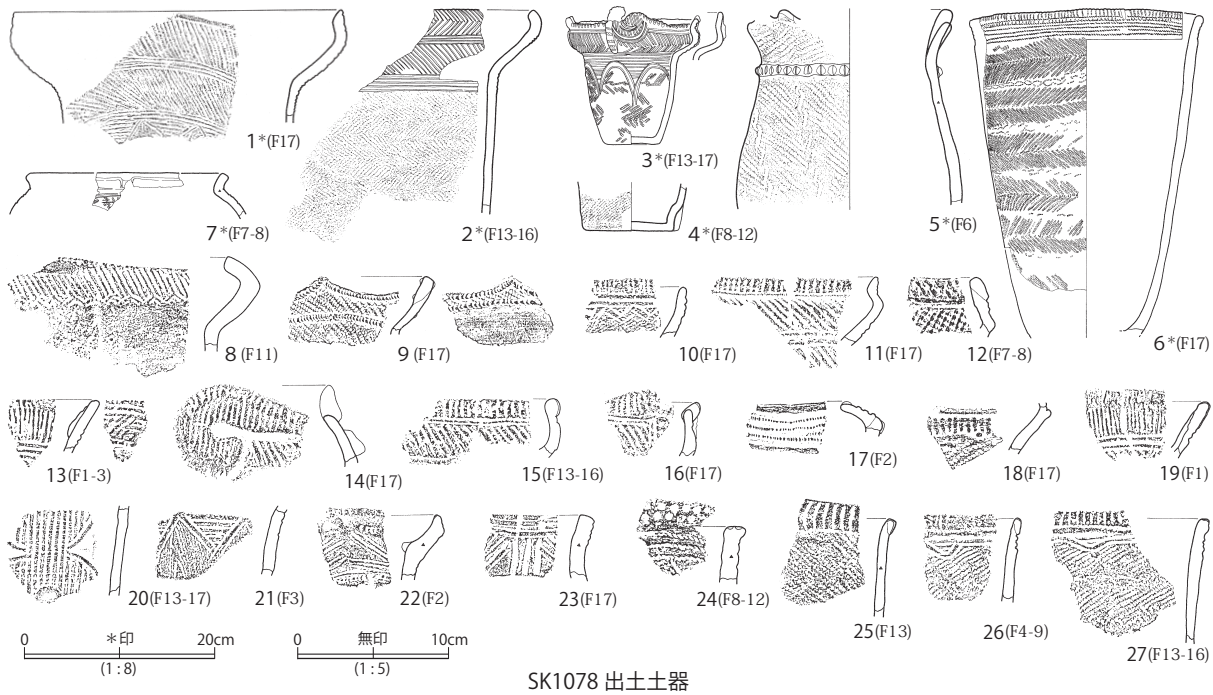


図7 山形県遊佐町吹浦遺跡の集落構成



SK1078 出土土器

図8 山形県吹浦遺跡出土土器（新段階）（1）

2014：25－26頁）。

SK1078 は調査区の南側で検出されたフラスコ状土坑で、口径は 143 × 130 cm、底径は 240 × 214 cm、検出面からの深さは 157 cm を測る。覆土からは縄文土器が多く出土したが、大破片資料の多くが底面に近い覆土下位から出土しており、土製耳飾 4 点も覆土下位から出土し、図 5－3 のみ底面から出土した。覆土から出土した土器は、新保式上安原段階・第Ⅱ段階（図 8－1～3・8・10～21）と円筒下層 d 式系（6）で構成され、西日本系の大歳山式（9）も伴出している。覆土中位（F 7－8）から出土した大木 6 式の小破片（7）は同式 1～2 期の混入品と思われ、覆土下位では大木 6 式の土器は明確でない。

SK1079 は前記した SK1078 の東方 3 m に位置したフラスコ状土坑で、口径は 168 × 140 cm、底径は 248 × 232 cm、検出面からの深さは 138 cm を測る。出土土器は 50 点報告されているが、大半が覆土下半からの出土品で、底面よりやや上位の F 12 から 22 点の土器が出土しており、図 5－6 は覆土下半（F 10）から出土した。覆土出土の土器は、SK1078 と同様に北陸系と円筒下層系土器で構成されている。前者は朝日下層式（図 9－25・26・32）と新保式上安原段階・第Ⅱ段階（8・12～24・27～31）が出土しており、後者は円筒下

層 d 式（1～3・5・11・38～45）が多く、全体の 1/3 以上に及ぶ。但し同式そのものではなく、少し変化した内容となっている。大木 6 式の小破片（46～49）は、同式 2～3 期の混入品と考えられる。

両土坑から出土した土器は、今村啓爾氏が吹浦遺跡の新段階（大木 6 式 4・5 期）として例示した資料である（今村 2006a・b）。同氏は新段階がこれまでの状況が一変し、主体が圧倒的に北陸系（朝日下層式、新保式上安原段階）となり、中段階に進出が著しかった普通の大木 6 式がほとんどなくなるのに替わり、それまで見られなかった円筒下層 d 系（そのものとは言えない少し変化した土器）が相当に伴うようになることを指摘した。土器から見た場合、北陸集団の影響を強く受けた様相が確認され、北陸集団の北上といった劇的な変化が生じた可能性が予察されている。

両土坑から出土した土製球状耳飾は、残存不良の図 5－5 を除くと、外径が 34～44 mm、内径が 9～16 mm、重量が 12～20 g の範囲にあり、最大厚が 13 mm 前後で、周縁が最も厚く縁取ったように強調されている。いずれも赤彩された精巧な作出で、規格性の強い内容となっている。西川氏に拠ると、この「十三菩提タイプ」は前期末十三菩提式期から中期初頭にかけて、関東西部（東京都多摩地域・神奈川県）から山梨県を中心として、北は



SK1079 出土土器

図9 山形県吹浦遺跡出土土器（新段階）（2）

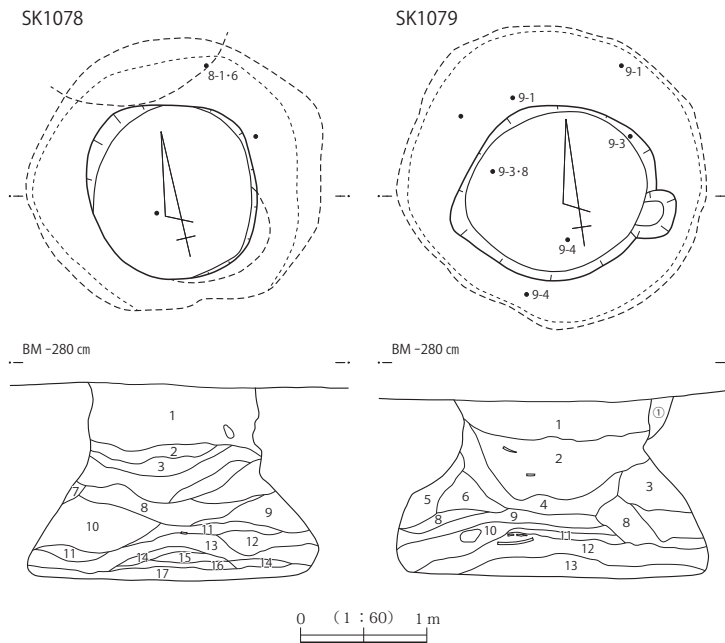


図10 吹浦遺跡 SK1078・1079 平面・断面図

山形県北部（吹浦遺跡）、西は長野県から石川県（真脇遺跡）まで広く分布している（西川 1995:72-73 頁）。集成図を見ると破損資料が大半で、吹浦遺跡のように完形品がまとまった事例は稀有である。周縁地域に優品が出土したのは、他所で製作された製品が持ち込まれたか、装着した人間の移動を反映したのであろう。

相原淳一氏は SK1078 に 5 個もの珧状耳飾が層位を変えて出土したことに対し、「継続的に廃棄ないしは流れ込んだものと考えられる。これらの土坑の周囲で死者から耳飾を外すといった葬送儀礼が行われていた可能性」（相原 2010b:131 頁）に言及している。土器で見ると、当該期の日本海沿岸部では北陸集団の北上といったドラスティックな現象が想定されており、吹浦遺跡では在地系の土器が姿を消し、異系統の土器で占められている。同遺跡から出土した土製珧状耳飾は、海岸伝いに北上した集団の傍証を固めるもので、貯蔵穴が墓に転用され、同耳飾を装着した北陸からの移住者が埋葬されたことを暗示している、と筆者は仮定している。

**(3) 東北地方出土の土製珧状耳飾**

東北地方では、秋田県、宮城県、福島県で 9 遺跡 14 点の土製珧状耳飾が、また新潟県では 6 遺跡 14 点が出土している。図 11 には、西川博孝氏と加藤学氏の研究（西川 1995、加藤 2010）を参考に筆者が渉猟した東北出土の資料と、周辺地域の関連資料を集成した。

図示資料のうち最古となるのは、宮城県名取市泉遺跡

の資料（3・4）である。同遺跡は大木 1～2a 式主体の遺跡となっており、2 例とも該期に位置する公算が高い。外径に比べ中央孔は小さいが、切目長が短く、古相である石製珧状耳飾の浮輪形や金環形に近似している。関東地方の土製珧状耳飾は時期が明確な最古の事例が諸磯 a 式期で、続く諸磯 b 式以降に盛行する（西川 1995:91 頁）。泉遺跡の 2 例は年代的に関東より先行することになる。しかし東北にはそれ以降継続した形跡は認められず、単発的であったと推定され、その他の大半の資料は前期末葉～中期初頭に位置している。

西川氏は 1・2・5・8・10 を I 型（下堤タイプ）と分類し、東北地方に固有のタイプと指摘した。縦長の形態で、脚部が横に張る形態

のものも含まれ、頂部両端が強い丸味を持っている点に特徴があり、前期末～中期初頭に属している。

9 は II 型（復山谷タイプ）と分類されている。同タイプは平面形はほぼ円形で、孔径が切目の長さより短くと規定されている。断面形態は多様であるが、中央孔が円の中心より上方に穿たれたものが大半で、東関東を中心に分布している。糠塚貝塚例（7）や浦尻貝塚例（11）も同タイプに含まれるであろう。

その他のタイプで東北地方に認められるのは、山形県内に顕著な IV 型（十三菩提タイプ）である。その特徴については上記した通りであるが、周縁が厚く作出されており、石製の代用品には当たらない。前期末葉十三菩提式期から中期初頭にかけて製作され、関東西部から山梨県に分布の中心がある。山形県以外では、福島県石川町薬師堂遺跡で 2 点（13・14）出土している。同遺跡は阿武隈川上流域の右岸に位置しており、13 は 13 号土坑の底面の壁際から出土した。同土坑は口径 120 cm の円形で、深さは 65 cm で底面は平坦であり、壁面下部が若干オーバーハングすることから、フラスコ状土坑の可能性が考えられる。覆土からは大木 6 式 2 期の土器片が出土しており、13 は同式前半に位置づけられる。同例は 1/2 の残存で、外径 34 mm、内径 14 mm、最大厚 17 mm を測る。14 は遺構外から出土したが、1/2 弱の残存で、表面が丁寧に磨かれている。両例とも断面形態が銀杏形を呈する点で、吹浦遺跡とは差異が存する。



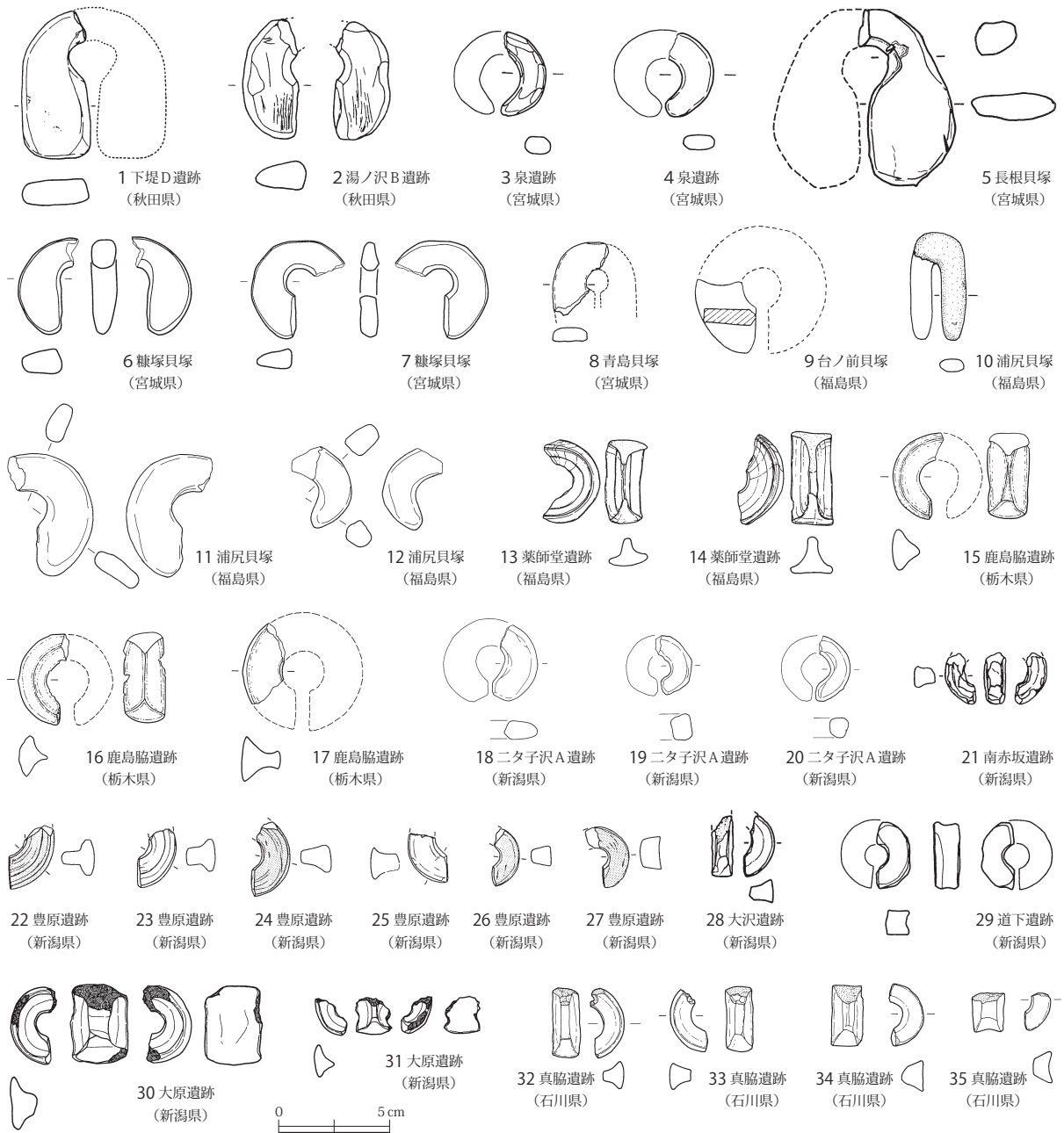


図 11 東北地方及び周辺地域出土の土製玦状耳飾集成図

薬師堂遺跡の資料に関連して、栃木県那須町鹿島脇遺跡を取り上げる。同遺跡では十三菩提タイプが遺構外から3点出土している(15～17)。薬師堂遺跡の南西方25 kmに位置しており、両遺跡は阿武隈川水系と那珂川水系を結ぶ経路に位置する(図12)。両遺跡出土品の共通性を考慮に入れると、分布の中心である関東地方から阿武隈川を經由して、山形県内(八幡原A・大壇B遺跡)に至る内陸ルートが存在が想定される。東北南半では大木6式3期に「十三菩提式鍋屋町系土器」が散発的に出土し、山形県内では高瀬山遺跡に当該例を見出すことができるが、関東の土器作りの系統を担った作

り手が移住して製作したことが想定されている(今村2006c)。内陸部で出土した十三菩提タイプの在り方は、上記した大木6式前半期の内陸部における人的交流の在り方を暗示した可能性が考えられる。

一方日本海沿岸部でも、近年十三菩提タイプの土製玦状耳飾が蓄積されている。新潟県内では角型の断面形態を含めると、破損品であるが6遺跡で認められる。特に新潟市(旧巻町)とよばら豊原遺跡は北陸系集団の進出経路上の遺跡と評価されており、朝日下層式～新保式の土器がまとまっている(今村2006a)。22～27が同遺跡で出土した十三菩提タイプであるが、22～25は同一層

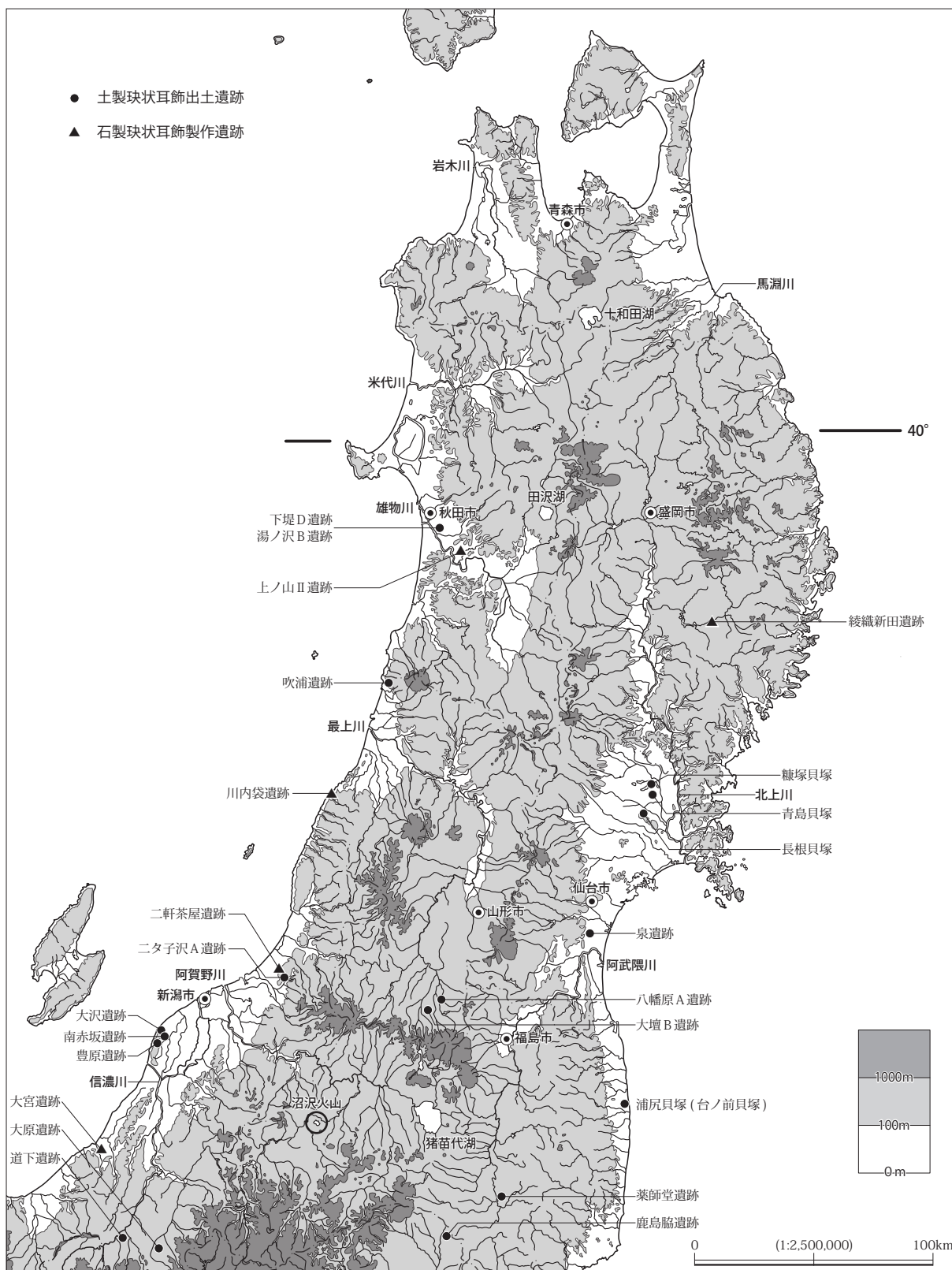


図 12 東北地方と周辺地域の土製玦状耳飾出土遺跡及び石製玦状耳飾製作遺跡

準 (C-3-2区II c層) から出土し、中期初頭の土器が伴出したとされている (小野ほか 1988)。前期最終末の吹浦遺跡 (SK1078・1079) にやや後続した資料となるが、形態は極めて近似しており、22・24・26・

27 は赤彩されている。

北陸の前期後葉～中期初頭の代表的遺跡である石川県能都町真脇遺跡では、4点の土製玦状耳飾 (32～35) が報告されている (山田編 1986)。真脇式期～朝日

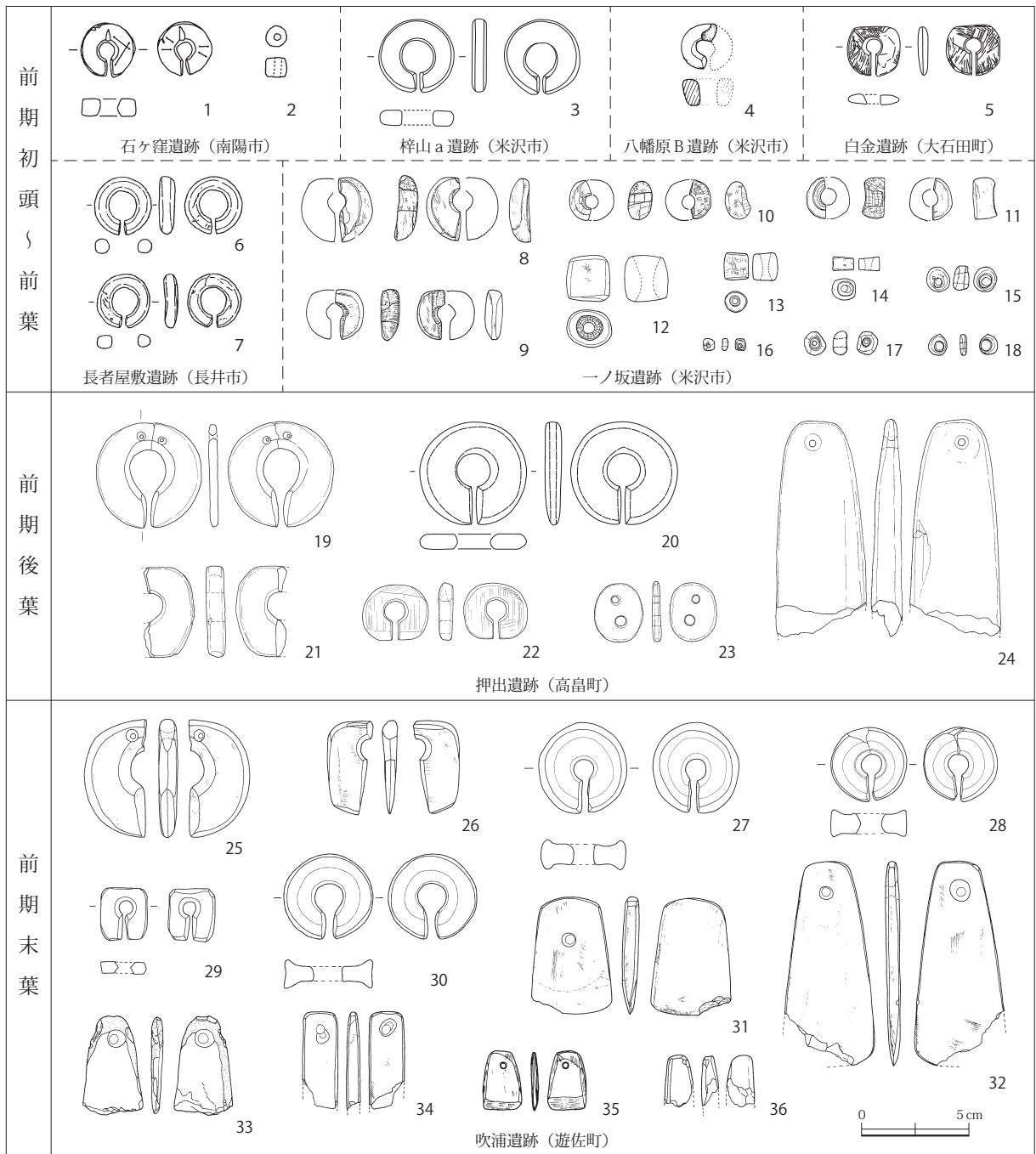


図13 山形県内の縄文前期石製装身具の変遷図（土製玦状耳飾を含む）

下層式期にかけた層準（XI層）から出土したが、特に32・35は彩色されており、下地に黒色塗料、上塗りに褐色塗料が塗布された漆塗りの事例との指摘もある（西川1995：74頁）。同様の彩色は新潟県南魚沼市（旧塩沢町）大原遺跡（30・31）でも確認されており、日本海沿岸部に丁寧に作出された十三菩提タイプの耳飾が分布していた可能性が高い。吹浦遺跡では漆塗りの痕跡は認められないが、上記した優品の系譜を引いていることは確実であり、大木6式3期末以降に土器で見られるような集団の北上現象があったとすれば、吹浦遺跡の土

製玦状耳飾は人の移動を反映した可能性が考えられる。前記した縄文土器の動態を考慮に入れると、日本海の海岸伝いに十三菩提タイプが移動した公算が高く、吹浦遺跡が北陸からの北上ルートの中継地になっていたように思われる。

## 5 結語

山形県内から出土した玦状耳飾と、それに関連して東北地方出土の土製玦状耳飾について考察してきた。山形県内の玦状耳飾の年代の変遷を図13にまとめたが、最

古の事例となるのは前期初頭上川名Ⅱ式期で、1・3・4が該当し、早期末葉の資料は指摘できない。小型の円形を基調とし、肉厚な円盤形(1・3)や指貫形(4)で、金環形の長者屋敷遺跡例(6・7)は前期初頭～前葉で年代が絞り込めない。一ノ坂遺跡(8・9)では管玉や白玉等(10～18)も伴うことから、前期前葉(桂島式～大木1式)の指標に位置づけられ、白金遺跡例(5)と共に上端の直線的な作出が特徴となる。初現期の石材は滑石製が卓越し、未製品は認められない。また土坑墓の出土例は白金遺跡(5)と長者屋敷遺跡(6・7)の2例で、特に後者では2点が対の関係で出土した。

続く前期中葉～後葉(大木2a～3式)の状況は判然としないが、押出遺跡が後葉大木4式の単純遺跡となっており、基準資料となろう(19～24)。中型の円盤形に方形が加わり、石材も蛇紋岩製、ネフライト製、緑色凝灰岩製と多様化する。石製装身具としては、管玉の他に流紋岩製の玉斧(24)が加わる。

前期末葉は日本海沿岸部の庄内地方が主体となる。サイズや形状が多様化し、前者では小型～大型までバラエティーに富み、後者では長方形や楕円形が現れ、また石材では粘板岩製が加わる。川内袋遺跡のような製作遺跡も出現し、消費地であった以前の状況とは異なった地域間交流が存したと推定される。また該期には土製珧状耳飾も出土しており、地域的な特徴となる。関東に主体がある「十三菩提タイプ」とされるもので、精巧な造作に特徴があり、吹浦遺跡では6点出土し、そのうち3点が完形品(27・28・30)であった。同タイプの広域的な分布が同時期の土器の動向と密接に関連するとの前提から、関東から内陸を経由してもたらされたのか、日本海沿岸部のルートが存したのか、その来歴を問題としてきたが、吹浦遺跡例は共伴した土器の内容から、後者の可能性が高く、北陸集団の北上の傍証になり得ることを指摘した。更に同遺跡では、ヒスイ製大珠(中期前葉以降に流通)の前駆となる玉斧(31～35)が、石製装身具セットの主体を構成する点で注目される。

以上のように、珧状耳飾に着目した地域間交流の視点から、縄文前期の地域社会の一端を垣間見てきた。当該品は石材が限定され、製作も容易でないことから、奢侈品として珍重され、限られた人々が装着していたと想定される。往時の社会構造を考える上で、有益な情報を内

包しており、資料集成が必須の手続きであることを確認した次第である。

最後に本稿をなすにあたり、西川博孝氏には土製珧状耳飾について様々なご教示を賜りました。山形県埋蔵文化財センターが所蔵する白金・高瀬山・吹浦・川内袋遺跡出土資料の観察では、後藤枝里子氏にお世話になりました。また石材の判定では水戸部秀樹氏にご指導を頂きました。記して感謝の意を表します。

#### 註

- 1) 耳飾以外の用途も想定されるとして、「珧飾」(Slit ring)と呼称する見解も提出されている(藤田2013)。
- 2) 東南北半の縄文時代前期編年では、前期初頭が上川名Ⅱ式、前期前葉が大木1式、前期中葉が大木2a・2b式、前期後葉が大木3～5式、前期末葉が大木6式に相当する。
- 3) その他に高畠町鳥取山洞窟で、方形タイプの半欠の珧状耳飾(二次穿孔有り)が報告されている(柏倉編1969:図版359)。同遺跡では前期初頭～前葉の羽状縄文施文の土器が主体となるが、大木5式相当の鋸歯状沈線文土器も認められており、耳飾は後者の時期に相当すると思われる。
- 4) 大木6式の細分については今村啓爾氏の5細分(今村2006a・b)に準拠した。しかし大木6式4期と同5期の山形県内の資料は吹浦遺跡を除いて明確でなく、同式の前半のみ該当する(小林2014)。
- 5) 福島県内の集成では、土製珧状耳飾や会津地方の資料(冨宮西遺跡等)が含まれていないので、29遺跡53点よりも大幅な増加が見込まれる。
- 6) 前期末葉～中期前葉には、滑石製・蛇紋岩製の珧状耳飾が糸魚川流域で殆ど製作されておらず、同地域で石製装身具の生産が再び活発になるのは、中期前葉以降のヒスイ製装身具である(加藤2010:19頁)。前期末葉～中期初頭は石材原産地から離れた地域で珧状耳飾が製作されたことが想定され、川内袋遺跡もその一つであったと考えられる。

#### 引用文献

- 阿部明彦 1983 『いるかい遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第69集 山形県教育委員会
- 相原淳一 2010a 「宮城県における珧状耳飾」『東北歴史博物館紀要』11 pp.1-12 東北歴史博物館
- 相原淳一 2010b 「Ⅳ 東北地方南部の縄文集落の葬墓制」『シリーズ 縄文集落の多様性Ⅱ 葬墓制』pp.125-148 雄山閣
- 伊藤邦弘・黒坂広美 1996 『野新田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第40集 山形県埋蔵文化財センター
- 伊東信雄・藤沼邦彦・須藤隆ほか 1969 『埋蔵文化財緊急発掘調査概報—長根貝塚—』宮城県文化財調査報告書第19集 宮城県教育委員会
- 今村啓爾 2006a 「縄文前期末における北陸集団と土器系統の動き(上)」『考古学雑誌』第90巻第3号 pp.1-43 (pp.181-223) 日本考古学会
- 今村啓爾 2006b 「縄文前期末における北陸集団と土器系統の動き(下)」『考古学雑誌』第90巻第4号 pp.36-51 (pp.296-311) 日本考古学会
- 今村啓爾 2006c 「縄文土器系統の担い手—関東地方から東北地方を北上した鍋屋町系土器の場合—」『伊勢湾考古』20(山下勝年先生退職記念号) pp.125-132 知多古文化研究会

表1 山形県内出土の玦状耳飾一覧

図番号	市町村名	遺跡名	材質	計測値(mm)				重量値(g)	時期	分類	出土地点	文献
				全長	横幅	内径	厚さ					
2-1	米沢市	一ノ坂遺跡	珪質凝灰岩	29.4	(33.0)	(9.0)	8.6	5.2	前期前葉	小型有明山?	HB1-MG II層	手塚ほか・1996
2-2	米沢市	一ノ坂遺跡	緑色珪質頁岩	22.4	(26.0)	(9.0)	7.4	2.9	前期前葉		HB1-AG I層	手塚ほか・1996
2-3	米沢市	一ノ坂遺跡	緑色珪質頁岩	—	—	—	3.5	1.0	前期前葉		HB1-AG IV層	手塚ほか・1996
2-4	米沢市	梓山a遺跡	滑石	(42.0)	(42.0)	(18.0)	11.0	6.33	早期末～前期前葉	中型有明山?	4区24-28?	渋谷ほか・2006
2-5	米沢市	梓山a遺跡	滑石	34.0	34.0	14.0	6.5	12.72	早期末～前期前葉	小型円盤形	4区SX251	渋谷ほか・2006
2-6	米沢市	八幡原A遺跡		80.0	(50.0)	(16.0)	7.5		大木6式2・3期	大型楕円形		加藤編1975
2-7	米沢市	八幡原B遺跡	玉質製	21.0	(24.0)	(9.0)	12.0		前期初頭	小型指貫形		加藤編1975
2-8	南陽市	月ノ木B遺跡		(35.0)	(35.0)	(19.0)	9.0?		早期末～前期後葉		28-29区 II層	黒坂ほか・1989
2-9	南陽市	石ヶ窪遺跡	滑石	25.5	25.5	7.5	8.2	19.1	前期初頭	小型指貫形	61-133G	鈴木ほか・2012
2-10	南陽市	長岡山遺跡	緑色凝灰岩	47.7	(36.0)	(13.0)	3.6	3.9	前期末～中期初頭	中型長方形	No.14	山田ほか・2013
2-11	高島町	押出遺跡	黒曜石?	26.0	30.0	9.0	6.0	8.7	大木4式	小型円盤形	SM1付近	山口編1990
2-12	高島町	押出遺跡	凝灰岩?	43.0	(45.0)	(13.0)	8.0	11.9	大木4式	中型方形?	ST18付近	山口編1990
2-13	高島町	押出遺跡	流紋岩	48.0	51.0	16.5	6.0	17.6	大木4式	中型円盤形	窪地	山口編1990
2-14	高島町	押出遺跡	ネフライト	48.0	50.0	15.0	8.0	30.5	大木4式	中型円盤形	SG105 F2	水戸部ほか・2014
2-15	高島町	一ノ沢岩陰		53.0	(52.0)	(15.0)	(3.0)		前期	大型楕円形?	第1岩陰	佐々木1971
2-16	長井市	長者屋敷遺跡	瑪瑙	28.2	28.2	14.1	7.5		前期初頭～前葉	小型金環形	土坑墓	佐藤1984
2-17	長井市	長者屋敷遺跡	瑪瑙	25.8	25.8	13.2	6.0		前期初頭～前葉	小型金環形	土坑墓	佐藤1984
2-18	大石田町	白金遺跡	滑石	22.6	24.8	7.0	4.4	3.73	前期初頭～前葉	小型方形	SK3(土坑)	山形県教委1992
2-19	寒河江市	高瀬山遺跡	緑色凝灰岩	53.0	(54.0)	(18.0)	5.0	8.57	大木5b～6式3期	中型円盤形	7区17-87	齊藤ほか・2005
2-20	寒河江市	高瀬山遺跡	安山岩?	73.0	36.5		12.5	29.89	大木5b～6式3期	未製品?	SP1898	齊藤ほか・2005
2-21	尾花沢市	いるかい遺跡	粘板岩	62.0	(50.0)	(16.0)	5.8	11.41	大木5～6式	大型楕円形?	44-95 II層	阿部1983
2-22	村山市	中村A遺跡	緑泥片岩	40.0	(41.0)	(12.5)	5.0	6.0	前期末葉?	中型円盤形	86-48	名和ほか・1983
3-23	旧朝日村	野新田遺跡	蛇紋岩?	29.0	(29.0)	(10.0)	4.0		前期～中期初頭	小型円盤形	A区?	伊藤ほか・1996
3-24	遊佐町	小山崎遺跡	蛇紋岩	46.0	(52.0)	13.0	8.0		前期	中型円盤形	第1調査区 VI層	渋谷ほか・2001
3-25	遊佐町	吹浦遺跡	蛇灰岩	41.0	25.0		5.0		大木6式	未製品	B地区(1952年)	藤田1983
3-26	遊佐町	吹浦遺跡	緑泥片岩	53.6	(59.0)	(16.0)	7.8	15.91	大木6式	大型円盤形	ST1090 EP3	渋谷ほか・1988
3-27	遊佐町	吹浦遺跡	硬玉?	42.4	(40.0)	(10.0)	6.3	5.96	大木6式	中型方形	SK1095 Y	渋谷ほか・1988
3-28	遊佐町	吹浦遺跡	蛇紋岩	24.0	21.5	6.0	4.8	5.20	大木6式	小型方形	SK1087 F8	渋谷ほか・1988
3-29	旧温海町	川内袋遺跡	粘板岩	45.5	(24.0)	(13.0)	4.0	2.36	大木5・6式	中型長方形	SK432(B地区)	齊藤2012
3-30	旧温海町	川内袋遺跡	緑色凝灰岩	61.0	48.0	9.0	9.0	24.57	大木4～6式	大型円盤形	5-14IV・4-15IV	齊藤2012
3-31	旧温海町	川内袋遺跡	緑色凝灰岩	53.0	51.0	14.0	5.0	9.25	大木4～6式	中型円盤形	4-13IV	齊藤2012
3-32	旧温海町	川内袋遺跡	緑泥片岩	44.0	(50.0)	(12.0)	8.0	11.31	大木4～6式	中型円盤形	下段 RP8	齊藤2012
3-33	旧温海町	川内袋遺跡	緑色凝灰岩	46.0	(42.0)	(12.0)	6.0	6.41	大木4～6式	中型方形	7-8	齊藤2012
3-34	旧温海町	川内袋遺跡	緑色凝灰岩?	33.0	20.0	7.5	3.0	2.99	大木4～6式	小型長方形	上段	齊藤2012
3-35	旧温海町	川内袋遺跡	緑色凝灰岩	30.0	(28.0)	(9.0)	4.0	1.86	大木4～6式	小型方形	4-8	齊藤2012
3-36	旧温海町	川内袋遺跡	蛇紋岩	35.0	—	—	6.0	6.83	大木4～6式	中型方形?	7-7	齊藤2012
3-37	旧温海町	川内袋遺跡	緑色凝灰岩	49.0	(49.0)	(16.0)	7.0	6.90	大木4～6式	中型円盤形	A区XO	齊藤2012
3-38	旧温海町	川内袋遺跡	粘板岩	34.0	—	4.0	4.0	2.37	大木4～6式	小型長方形?	A区XO	齊藤2012
3-39	旧温海町	川内袋遺跡	緑色凝灰岩	25.0	—	—	5.0	2.40	大木4～6式	中型円盤形?	下段	齊藤2012
3-40	旧温海町	川内袋遺跡	蛇紋岩	27.0	—	—	3.0	1.50	大木4～6式	垂飾転用?	下段	齊藤2012
3-41	旧温海町	川内袋遺跡	蛇紋岩	49.0	—	—	7.0	7.90	大木4～6式	破損転用?	7-7	齊藤2012
3-42	旧温海町	川内袋遺跡	緑色凝灰岩	44.0	(53.0)	—	5.0	6.48	大木4～6式	穿孔途中	4-8 RQ94	齊藤2012
5-1	遊佐町	吹浦遺跡	土製	38.8	39.7	13.0	13.5	16.98	大木6式4・5期	十三菩提型	SK1078 F13	山形県1988
5-2	遊佐町	吹浦遺跡	土製	33.7	34.3	10.0	12.7	12.16	大木6式4・5期	十三菩提型	SK1078 F17	山形県1988
5-3	遊佐町	吹浦遺跡	土製	40.6	40.1	9.0	13.5	19.73	大木6式4・5期	十三菩提型	SK1078 Y	山形県1988
5-4	遊佐町	吹浦遺跡	土製	43.8	43.0	16.0	13.7	16.86	大木6式4・5期	十三菩提型	SK1078 F17	山形県1988
5-5	遊佐町	吹浦遺跡	土製	40.0	(47.0)	(19.0)	17.1		大木6式4・5期	十三菩提型	SK1078 F8-12	山形県1988
5-6	遊佐町	吹浦遺跡	土製	37.0	(39.0)	16.0	13.8		大木6式4・5期	十三菩提型	SK1079 F10	山形県1988
5-7	米沢市	八幡原A遺跡	土製	26.0	26.0	9.0	9.0		大木6式2・3期	十三菩提型	C-5区 第4層	手塚ほか・1977
5-8	米沢市	大壇B遺跡	土製	42.0	(46.0)	(20.0)	14.0	11.6	大木6式1期	十三菩提型?	87-77 III層	山形県教委1986
5-9	米沢市	大壇B遺跡	土製	36.0	(46.0)	(20.0)	16.0	7.6	大木6式1期		85-82 III層	山形県教委1986
5-10	米沢市	大壇B遺跡	土製	30.0	(32.0)	(17.0)	17.0	5.4	大木6式1期		98-8T III層	山形県教委1986

(括弧内の数字は推定した径を示す)

- 岩崎義信編 2011 『第15回企画展 耳飾り展』 長井市古代の丘資料館
- 大越道正・松本茂ほか 1983 『国営総合農地開発事業 母畑地区遺跡発掘調査報告13 薬師堂遺跡・蓬入遺跡・栗木内塚』 福島県文化財調査報告書第117集 福島県教育委員会・福島県文化センター
- 大竹憲治 2010 「福島県の玦状耳飾」『玉文化』第7号 pp.91-98 日本玉文化研究会
- 大友透・鶴崎哲也 1998 『泉遺跡—宮城県警察学校建設関係発掘調査報告書—』名取市文化財調査報告書第39集 名取市教育委員会
- 小野昭・前山精明ほか 1988 「巻町豊原遺跡の調査」『巻町史研究』IV pp.1-71 巻町
- 大野憲司ほか 1988 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ—上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡—』秋田県文化財調査報告書第166集 秋田県教育委員会
- 柏倉亮吉・江坂輝彌ほか 1955 『吹浦遺跡』 荘内古文化研究会・サイエンス社
- 柏倉亮吉編 1969 『山形県史 資料11篇 考古資料』 山形県
- 加藤孝・後藤勝彦 1975 『宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告—内陸淡水産貝塚の研究—』(南方町史資料編・第1部 別刷) 南方町
- 加藤 学 2010 「新潟県における玦状耳飾」『玉文化』第7号 pp.1-31 日本玉文化研究会
- 加藤稔編 1975 『米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書 第1集』 米沢市教育委員会
- 川崎 保 2004 「玦状耳飾」『季刊考古学』第89号(特集 縄文時代の玉文化) pp.17-20 雄山閣
- 川田 強 2006 『浦尻貝塚2』南相馬市埋蔵文化財調査報告書第1集 南相馬市教育委員会
- 日下部善己ほか 1971 『浦尻貝塚』福島大学考古学会発掘調査報告書第1冊 福島大学考古学会
- 黒坂雅人・渋谷孝雄 1989 『月ノ木B遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第135集 山形県埋蔵文化財センター
- 小林圭一 2010 「山形県の玦状耳飾」『玉文化』第7号 pp.73-78 日本玉文化研究会
- 小林圭一 2014 「吹浦遺跡出土の縄文土器—今村啓爾氏の研究に学ぶ山形県内の縄文前期末葉の土器群—」『研究紀要』13 pp.3-51 東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 齊藤主税 2012 『川内袋遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第197集 山形県埋蔵文化財センター
- 齊藤主税・須賀井明子 1994 『高瀬山遺跡(1期)第1~4次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第121集 山形県埋蔵文化財センター
- 佐々木洋治 1976 『高島町史 別巻 考古資料編』高島町
- 佐藤鎮雄編 2007 『押出遺跡』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 佐藤正二郎 1984 「第一編 原始時代の長井」『長井市史 第1巻 原始・古代・中世編』pp.1-318 長井市
- 佐藤浩彦 2004 「北日本最大の滑石攻玉遺跡—岩手県綾織新田遺跡—」『季刊考古学』第89号(特集 縄文時代の玉文化) pp.65-66 雄山閣
- 佐藤浩彦・小向裕明 2002 『新田Ⅱ遺跡』遠野市埋蔵文化財調査報告書第13集 遠野市教育委員会
- 佐藤雅一・長沢展生ほか 1994 『大原遺跡第3次発掘調査報告書』塩沢町埋蔵文化財報告書第17輯 塩沢町教育委員会
- 佐藤雅一・原ひろみ 2000 『道下遺跡 縄文時代編—国営農地再編整備事業に伴う遺跡発掘調査報告書—』津南町文化財調査報告書第31輯 津南町教育委員会
- 渋谷孝雄・佐藤正俊 1985 『吹浦遺跡第2次緊急発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第93集 山形県教育委員会
- 渋谷孝雄・黒坂雅人 1988 『吹浦遺跡第3・4次緊急発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第120集 山形県埋蔵文化財センター
- 渋谷孝雄・須賀井新人 2006 『梓山a遺跡・梓山d遺跡・町在家跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第151集 山形県埋蔵文化財センター
- 渋谷孝雄・竹田純子 2001 『小山崎遺跡第4次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第91集 山形県埋蔵文化財センター
- 鈴木義三ほか 2012 『蒲生田山古墳群・総合公園内遺跡群発掘調査報告書』南陽市埋蔵文化財調査報告書第5集 南陽市教育委員会
- 芹沢長介 1965 「周辺文化との関連」『日本の考古学 II 縄文時代』pp.418-442 河出書房新社
- 田中耕作ほか 2003 『二太子A遺跡発掘調査報告書—県営農村活性化住環境整備事業(菅谷地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—』新発田市埋蔵文化財調査報告書第26集 新発田市教育委員会
- 塚本師也ほか 1988 『鹿島脇遺跡・追の窪遺跡—国道294号線改良工事に伴う発掘調査報告—』栃木県埋蔵文化財報告書第93集 栃木県文化振興事業団
- 手塚孝ほか 1977 『米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書 第3集』米沢市教育委員会
- 手塚孝・菊地政信 1996 『一ノ坂遺跡発掘調査報告書』米沢市埋蔵文化財調査報告書第53集 米沢市教育委員会
- 長井市教育委員会 1980 『長者屋敷遺跡第2次調査概報』長井市教育委員会
- 名和達朗・渋谷孝雄 1983 『中村A遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第73集 山形県教育委員会
- 西川博孝 1995 「再び土製玦状耳飾について」『千葉県文化財センター研究紀要』16 pp.63-104 千葉県文化財センター
- 福田友之 1999 「本州北端の玦状耳飾」『研究紀要』第4号 pp.17-30 青森県埋蔵文化財調査センター
- 藤田富士夫 1983 「玦状耳飾」『縄文文化の研究 7 道具と技術』pp.261-274 雄山閣
- 藤田富士夫 2013 「石製装身具総論(始源期)—玦状耳飾研究の現在—」『公開シンポジウム 縄文時代装身具の考古学—身体装飾をどうとらえるか—』pp.69-74 早稲田大学先史考古学研究所
- 前山精明 1994 「大沢遺跡A地区の調査」『巻町史 資料編1 考古』pp.301-329 巻町
- 水戸部秀樹ほか 2014 『押出遺跡第4・5次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第212集 山形県埋蔵文化財センター
- 宮本一夫 2013 「東アジア的視点から玦状耳飾を考える」『公開シンポジウム 縄文時代装身具の考古学—身体装飾をどうとらえるか—』pp.1-6 早稲田大学先史考古学研究所
- 山形県教育委員会 1986 『大壇B・C遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第103集 山形県教育委員会
- 山形県教育委員会 1992 『分布調査報告書(19)』山形県埋蔵文化財調査報告書第171集 山形県教育委員会
- 山口博之編 1990 『押出遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第150集 山形県教育委員会
- 山田渚ほか 2013 『長岡山遺跡・長岡山東遺跡発掘調査報告書』南陽市埋蔵文化財調査報告書第7集 南陽市教育委員会
- 山田芳和編 1986 『石川県能都町真脇遺跡—農村基盤総合整備事業能都東地区真脇工区に係る発掘調査報告書—』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
- 山内清男 1964 「日本先史時代概説 III 縄文式文化」『日本原始美術 1 縄文式土器』pp.140-144 講談社